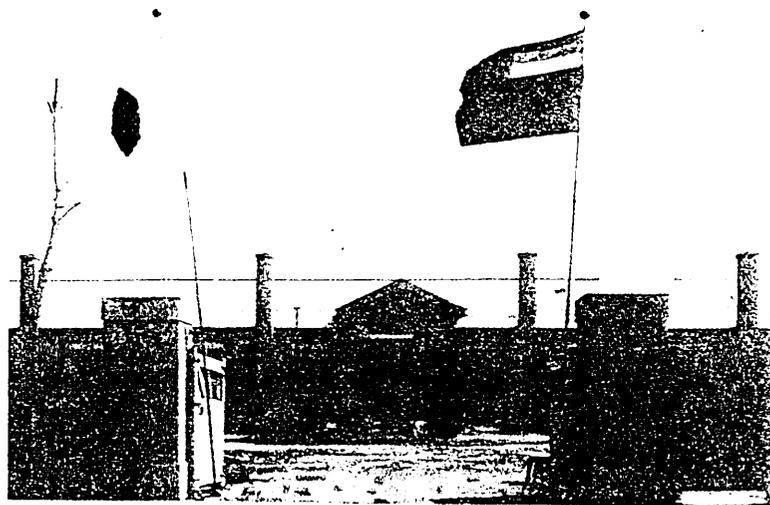
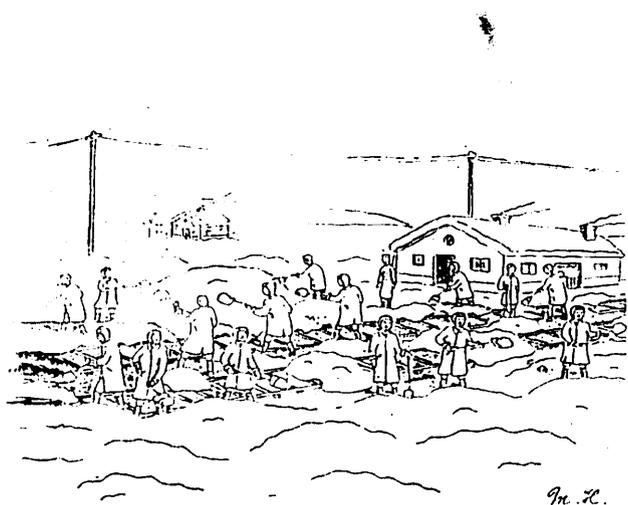


# 經理部 幹部候補生の終焉



新京陸軍經理学校 正門  
(満州第815部隊)



同日即日本自動車査定協会山口県支所事務長  
就職  
平成元年十二月三十一日同所定年退職  
現在に至る

会よりある。

九月上旬ハルビン出発、コロ島に到着。引揚者収容所に入所。

九月十八日コロ島を引揚船にて出発、樺岡博多港に入港。コレラ発生のため港外繋留。

十月十日博多港に上陸、同日復員手続き後帰省する。

【筆者のミニ自分史】

山田 正義 大正 年 月 日生まれ

番七四七

山口県防府市新田八六一・八

☆

①昭和十九年十月一日現役兵としてハルビン満

洲第二〇九部隊入營

同年十月十三日歩兵第二三五連隊（満洲国間

島省羅晉泉春化村）に転属

昭和二十年六月一日陸軍經理甲種幹部候補生

に合格

同年七月一日関東軍經理部教育隊（関東軍新

京經理学校満洲第一三九二三部隊）入隊

②

③昭和十六年十二月二十五日山口県防府市県立

防府商業高校（旧市立防府商業学校）卒業

昭和十七年三月一日満鉄生計組合入社ハルビ

ン中央生計所配属

昭和二十二年二月一日進駐軍第六ニュージ

ランド軍総合病院労務官室書記官就職（山口

県宇部市東岐波 現国立病院山陽荘）

同年十月配属公団山口支団（宇部市）石炭検

査員就職

昭和二十三年石炭統制撤廃のため退職

家業に従事

昭和二十五年四月一日朝日新聞・朝日広告社

入社

昭和二十九年九月二十九日山口マツタ（株）入社

昭和五十五年九月十日同社定年退職

吉林脱出

新京残留の一年

島根県

今瀬 正夫

ソ連軍の侵攻

八月九日

昭和二十年八月八日水曜日、夏のさかりの暑い一日の教育も終わり、消灯ラップと共にベッドに入る。昼間の疲れにぐっすり寝こんで居る真夜中、突如「起床！非常呼集」慌たゞしく叫び回る不寝番の声にとび起き、軍衣袴を着けるもどかしく「演習か、本物か」と訊ねると「本物のようです」と走り去って行った。

倉前に整列、週番士官から敵機来襲のため防空壕へ退避の指示あり、半信半疑、米軍機が満洲深く空襲する程戦況は逼迫しているのだろうか。完全武装で後ろの丘の防空壕へ駆足行進、八月とは云え真夜中の冷気は肌寒い。遠く眼下に広がる新京の街の夜空に、姿はみえないが純

い爆音が響いている。敵機の数はいくつも多くなさそうだ。

薄暗い街の一角で赤いノロシが上がると間もなくその辺りで爆発が起こる。暫くするとまた彼方、此方でノロシがあがる。飛行機はノロシを目標に爆撃しているらしい。数カ所爆撃した後鈍い爆音は暗い空に消え去り、あとは夜のしじまに草葉の虫の声だけがきこえる。

防空壕の中は膝のあたりまで水があつて入れず、壕のおおいの上に寝る。夜明け近い空はきれいに澄み渡り、夜露が冷たい。夜が白々と明けはじめるところ隊へ帰る。夜露に冷えてか、腹をこわした者が多い。

深更の空襲は何れの国が行なったものか、よく判らないまゝ、軍装の片付けをする。

午後、部隊長の訓示あり、今晩ソ連が我が国に宣戦布告すると同時に満ソ国境を突破、各方面より空陸機動部隊が大挙侵入して来て居る由。今晩の空襲はアメリカ軍によるものと思つていたがソ連機だったのだ。米英支連合軍の他に、

八月十日

正規の警備隊が到着するから候補生は帰隊せよとの命令により緑園へ帰る。途中、街は慌ただしさは感じられるが昨晩の空襲時に感じた程の緊迫感はない。だがソ連機甲部隊が急進を続けていると云う不気味さと不安は消えない。

八月十二日

舎前に全員整列。部隊長より「九日深更、国境を突破した大規模な機甲部隊は戦車を先頭に急速度で進撃して居り、明日正午頃には当新京を襲撃するものと思われる。我が部隊は現在地を死守するため当地点に於いて敵戦車隊を迎撃する」旨の訓示が行なわれた。

営庭に隣接する緩やかな丘陵地、道路に蛸壺を掘り、これに潜んで敵戦車が頭上に来るのを見計らって爆砕する。蛸壺内の人間もろともである。馴れぬ手に円び、つるはしを持って、二人が入れるだけの深さ、径共に一尺位の蛸壺を掘る。炎天下汗を流しながら明日はこの世の最後の場所となる穴を数多く掘る。次いで、明日

日ソ不可侵条約を反古にしたソ連をも敵に回すこと、なり戦局の厳しさを感ずる。

訓示後、完全軍装で宮廷府へ赴き警備につく。宮廷府の少し手前、直線道路を挟んで並ぶ幾つかの防空壕の傍らに小さい塹壕を掘り、警備にあたる。夏の陽は眩しくふりそ、ぎ、遠く広がる緑の原野はとも戦時下とは思えない程のどかであるが、現実には口助はこの新京を目標に撃つて進撃しているのだ。

夜空に空襲警報のサイレンが鳴り渡ると間もなく、黒塗の乗用車が直線道路を走って来る。車は剣付銃に停められ、参謀胸章を着けた車中の将校は誰かに対し「張國務總理」と答えて宮廷府内へ車を進めて行く。続いて後から数台満洲国高官を乗せた車が通過、着剣した戦友達の顔は何れも真剣そのものだ。遠くかすかに爆音が聞こえる。防空壕の中は水があつて入れず、止むなくおおいの上や塹壕の中で交替に仮眠をとる。

共に死ぬる仲の良い者二人迄、組になれとの指示で、お互い確かめ合いながら一緒に死ぬ相手と組になる。

受領した羊羹大の黄色火薬を指揮台の上で縦横に積み重ね、二十cm立方程の大きさに紐で結束、中央に雷管と十cm程の導火線をしっかりと結びつける。導火線は一秒に一cmの早さで燃焼する由、点火後十秒の命である。

明日この爆薬で一生を終わるのかと思いつ、作業をしている間も、時計の針は生から死へと一秒々々確実に刻んでいる。時を止める事の出来ない切羽詰まった苛立ち、諦め、交々の思いが過ぎる。強い日射しの営庭の、異様な静けさの中で、軍服の背まで汗を滲ませ額の汗を拭いながら作業が続く。各々の胸の内に去来するものは何だろう。

爆薬作りの作業が終わる各組に一箱宛マッチ配付、明日蛸壺の中ではその一人が爆薬を持ち、もう一人がそれに点火する。その為のマッチである。

夕方酒保の倉庫が開放された。酒、饅頭、羊羹、缶詰等十分な量を区隊へ持ち帰り、爆薬の前で最後の宴がはじまったが呑んでも酔わない、醉えない、神経だけがピリピリしている。目を向けまいと思いつつも、ついつい視線は棚の上の爆薬の方へ向く。話し疲れ、呑み疲れて、何時の間にか眠りにおちる。

八月十三日

遠くかすかな起床ラッパに身を起こす。呑み過ぎて頭が重い。棚の上には厳然と爆薬が乗っている。今日が最後の日なのだ。頭も重い気も重い。朝食が終わった後になっても蛸壺への出動命令は出ない。その内、ソ連機甲部隊の到達は当初見込みより遅れて明日になる見込みが強いとの判断から、秘密書類等を処分する作業が命令され、事務室から次々と運び出しては焼却した。

夕刻事務室の前で風呂敷包みを胸にした女性の軍属が「私達は今日でこの勤めは終わりました。御元気で、さよなら」と挨拶して帰って

行った。部隊に勤務していた軍属の人達は今日解職されたようだ。

いよいよ明日は爆死かと重い心で区隊へ戻る。夜おそくなってから命令伝達「現在地死守の命令は変更、当部隊は通化において教育続行することになった。出発は明朝」死守が変更になり、死から一步遠のいた。

皆もホッとした表情で、教科書、ノート、被服、携帯糧秣等を背囊、雑囊に詰める。

昨夜の沈鬱な空気は薄らぎ安堵感が漂う。悲愴な思いで作った爆薬は要らなくなった、さよなら、爆薬との別れは嬉しい。

#### ・通化へ向け行軍

八月十四日

早朝からの出発準備も完了し、完全軍装で全員営庭に整列。僅か、一ヵ月半程の間であったがこゝ緑園の思い出は多い。再び帰り来ることはないであろう。進むのか退くのか足は重い。暫く進むうち、遙か後方で爆発音が連続して起

こる。隊舎等諸施設を敵に利用させないため隊舎を爆破しているとのこと。

行進する街の中は先日とは打って変わって慌ただしさを増して居り、ロータリーでは協和服の日本人が兵隊と共にバリケードを築き、銃座の土嚢を積み上げ等して敵迎撃の準備が進められている。兵科部隊は我々の後に残って敵を迎え撃つのだろう、彼方此方に陣地が構築され、高射砲の砲身は水平に向けられている。

大同広場で大休止、炎天下の行軍で喉がカラカラ、水筒を口にするとムカツとする。一昨夜最後の宴のとき、蛸壺での死出の杯用に詰めた酒だった。戦友の水筒で喉を潤す。

新京駅で乗車する予定の列車が来ないので徒歩で通化へ向かう事に変更された。

炎天下の行軍。演習ではない、実戦なのだ。日暮れて大南屯で野営。新京から約三十哩。

八月十五日(水)

野営地をあとに一日中行軍、二日目にして足を痛め行軍が辛そうに見受けられる者もあるが、

行軍は続く。伊通街の学校にて宿営。

新京→30軒→大南屯→39軒→伊通街 計69軒

八月十六日(木)

秘甲(防毒面)を持って集合すべしとの命令、積み上げて焼却する。ゴムの燃える臭いが鼻を突く。秘密兵器を燃やさなければならぬのはソ連軍の追撃が迫っているのだろうか、目に見えぬ敵に追いかけられているのは気持ち良くない。行軍開始。完全軍装での行軍三日目、疲労がたまっていくのが判る。防毒面はなくなったが背囊、雑囊、小銃、前後の弾薬盒、帯剣は、ずっしりと重い。道端に次々と捨てられたノートの、缶詰、果ては鉛筆までが連なって散らばり、行軍の辛さを語っている。とにかく紙一枚でも軽くしたい。汗は出つくして顔も手も干からび、火照った膚には白く塩がふいている。疲れた戦友が後れる。銃を持ってやるが少し歩むとまた遅れ出す。隣の戦友が背囊を持ってやるがどうとう停まってしまつて動かない。「足は靴ずれだし体力は限界だから置いて行ってくれ、敵が

来たらず榴弾で自爆するから先に行って呉れ」置いて行く訳にはいかない。引張り起こして装具をみんな分ち持ち、両側から肩を抱え、引きずるようにして進む。

この朝出発時に「現地人の物を徴発するなどして刺激を与えないように」との注意を受けては居たが、部隊の先頭の隊列の中に加わっている大車が数台見える。本部は何かの方法で調達したものに違いない。落伍しそうな戦友を残置見殺しにする訳にはいかない。命令違反で叱られたらその時はその時だ。狙っているうち前方からタイヤを満載した大車がやって来た。ドサクサに紛れて軍の物資を略奪して来た奴に相違ない。車夫に銃を向けて停止させ、積荷のタイヤを全部放り落として反転させて落伍寸前の戦友を抱え上げ横たえる。周りからも次々と背囊、雑糞果ては銃まで乗せだした。

身軽になれば元氣も出てくる。やがて前の方でも後の方でも大車の徴発が始まり相当数の大車が列に加わった。

てのことだろう、暗闇の中をただ黙々と進む。前からの小休止の遞伝に、身体を立ったま、後ろへ倒れ僅かな休息をとる。

白々と辺りが明けそめる頃、点在する満人農家の壁に並べて貼られた、五極星の下に鎌とハンマーをあしらったソ連国旗と、青天白日旗が目に入る。あちらの家もこちらの家にも同じ旗だ。この辺りは既にソ連軍が制圧したのだろうか、とすれば此所は敵地だ。家に潜む満人達はどうな気持ちで我々の行軍を窺い見ているのだろう。

突如大粒の雨が降り出した。叩きつけるような雨の中を携帯天幕を羽織っての行軍が続く。明るい内に満人部落に分宿。背囊に結びつけて居た毛布は大車の上で水を吸い、ビショビショに膨れ上がっている。

野営にも使えないし乾きもしないだろうと、宿賃代わりに満人に渡す。

泥造りの小さな満人農家では眠る場所とてなく部屋は住人に当てがい、我々は土間。私は竈

竹内候補生のこと

宿営の夜、竹内候補生が股ずれで昼間歩くのも困難とのこと。汗と汗でピツタリとくっついた袴下を脱がすと、両内股は掌大に皮がむけて赤く腫れ、汁が滲んでいる。私物の「オゾ」を塗って繻帯したり、又ある時はお湯で拭いて天花粉の代わりに歯磨粉をふりかけたりしたが、御本人はさぞ痛かった事だろう。竹内候補生は応召で、私達よりも十四、五才年上の、元オリンピック選手として活躍された温和な人柄の方だった。時折胸ポケットから奥さん、子供さん達の写真を取り出し御家族の話をする事もあった。平和な家庭をあとに応召し、こんな苦勞を重ねられる御本人の気持ちと思うと、チョンガーの私は胸を締めつけられるようであった。新京―30軒―大南屯―39軒―伊通街―22軒―営城子 計91軒

八月十七日(金)

昨夜おそくからの夜行軍、ソ連軍の目を避ける

の壁際に立てかけた、燃料用の玉蜀黍の殻の中に潜り、地虫の声をききながら仮眠をとる。新京―30軒―大南屯―39軒―伊通街―22軒―営城子―31軒―朝陽山 計122軒

八月十八日(土)

昨夜おそくからの夜行軍が続く。眠りながら、前者の足音を頼りに足だけが情性で動いている。辺りが白みはじめた頃、前より遞伝、大休止。前方上り坂の辺にざわめきがある。糞抹の大車が転覆して、乗っていた鈴木候補生が死亡したとのことだ。折角ここまで苦勞して来たのにさぞ心残りだろう。手を合わせて冥福を祈る。

重苦しい行軍が続く中、ズン胴の飛行機が爆音を響かせて飛来、低空を二、三回旋回した後飛び去って行った。今の飛行機が通信筒を落とすして行ったと言う。

打ち続く行軍に汗は出尽くし、顔は塩でザラザラ、暑い。水筒は既に空っぽになっている。周りの戦友の水筒を四、五個宛集め、三名程で

菊の御紋章を命より大切に扱おうよう教育されていた目には、麻袋の上に積み上げられた銃が敗戦の哀れさをそゝる。

何名かの候補生が、ソ連軍に引き渡す為、銃、弾薬を大車に積んで出発して行った。部隊が携行した糞抹や軍馬を開拓団へ譲渡するため、大車に積み込んで赴く。このような僻地に取り残された婦女子の今後のことを思うと心が痛む。

敗戦の心は重い。生きて虜囚の辱めを受けず、軍服を着た以上責任もある。国へ辿りつける見込みは立たない、潔く死のうと、返納しなかった手榴弾を物入れに入れ、死に場所を探し求めたが、土盛りの陰にも、大樹の陰にも、戦友達の人があって恰好な場所が見当たらない。

盛り土の上に寝そべって青い空を仰ぎ見ていると様々な思いが去来する。ふと故郷の菩提寺の本堂の彫額を思い出す「人來問道 無餘説 雲在青天 水在湖」大きい扁額であった。そして父母兄弟姉の顔が浮かんで来る。皆が待っているのだ、帰らねばならない。戦争に負けたか

らと云って死んでたまるか。死ぬのは何時でも死ぬる、生きれるだけ生き続けよう。迷い心はふっ切れた。手榴弾は小川へ捨てる。

教官に引率されて十人ばかりで支那風呂へ行く。薄暗い浴室の、大きな浴槽のたぐりの湯に浸って半月分の垢を落とし、さっぱりする。ゴロ寝の肌寒さに、縮こまって寝ている夜明け方、驢馬の嘶きに夢を破られる。体型とは似つかない淋しげな声は肺腑に沁み渡る。行軍途中の我々に徴発反転させられ、何日間も大車を曳いて我々を助けて呉れた馬たちが故郷を恋しがつての嘶きか。

強制的に長い距離を運搬させられた大車の車夫達に対して、部隊から相当の金額が支払われたとのことであった。

八月二十五日

吉林

「只今より吉林へ赴き、ソ連軍の管轄下に入る」との部隊長の命令で、朝陽鎮駅へ向かう。管轄下に入ると云うことは捕虜なのか、それ

水補給に行く。目標は二百米程前方を、右へ折れて百米程の満人農家。念のため銃を一挺持って隊列の右側を足早に進み、やっと到着。家から出てきた満人夫婦に戦友が「良水麼？」「是！」木の釣瓶で深い底から汲み上げた水を念のため満人に飲めと云うと怪訝そうな顔をしながらゴクリゴクリと飲む。これなら大丈夫と腹一杯飲んだ後、頭からかぶり、塩を吹いた顔や手を洗うと、冷たい水は火照った体を生き返らせて呉れる。満タンにした水筒を肩に歩を速め、やっと隊列に戻る。

日の高い内に宿营地一座営着、開拓団の家に分宿。

新京―30軒―大南屯―39軒―伊通街―22軒  
―宮城子―31軒―朝陽山―28軒―一座営  
計150軒

八月十九日(日)

開拓団の人達に別れを告げて出発。曠野に点在する草薺き土造の満人農家は全て壁に支那、

ソ連の紙旗が貼られている。

正に敵中に行く心地。大車の列を連ねた部隊は、行軍の終点となった朝陽鎮へ到着。

部隊長より「我国は八月十五日連合国に無条件降伏した」旨訓示あり。

八月十四日新京を出てから今日まで六日間、ここ朝陽鎮まで道路距離約一八〇軒、真夏の炎天の日、降り続く雨の日、ソ連軍の目を避けての徹夜行軍、戦友の不慮の死、行軍の後半は、徴発した大車のお蔭で装備は軽くなっていたが、通化まであと一三〇軒、全行程の約四割を残して行軍は終わった。徒歩で此処まで遅々来つるものかなである。宿営は、学校の教室へ携帯天幕を敷いただけであるが、行軍中の宿営とは異なり、手足を伸ばして横になる事が出来た。

八月二十日――二十四日

児童のいない学校はガランとして空しい。

ソ連軍に武器を渡すため、小銃の手入れをする。汚れがあつてはならじと銃口、遊底、床尾板に至るまでスピンドル油で入念に手入れする。

とも日本へ送還のためなのだろうか、色々と臆測するが判断出来ない。

未知への不安を乗せ汽車は走る。一望千里広大な大地は、遮るものなき夏の陽を浴びて遥か彼方で空と接している。時折点在する農家、広い畠には戦争の影はなく、長閑に鋤を振る農夫の姿は平和そのものだ。

鉄路約一八〇軒吉林駅着、本線を過ぎて構内はずれの引込線奥深く停まる。

窓外には濃いカーキ色のルパシカ風軍服のソ連兵が、あちこちで貨車荷物の積み下ろし作業をしている。それらを監視しているのか、マンドリン状の連発銃を吊革で肩に吊り動哨している兵隊も数多く見受けられる。勝者と敗者、初めて接した時どのような儀式が行なわれるのだろうか。英軍がシンガポールで降伏したとき日英軍ともに、将校が礼儀正しく敬礼し合っていたニュース映画の影像が目に浮かぶ。

突然車内の話し声が絶え、シーンと静まり返った。車輛のドアからマンドリン、拳銃を構え

今夜は車中泊。定員一ぱいの座席では眠りにつけず、網棚へ横になったが寝心地良からず、遂に座席の下へ携天を敷いてもぐり込む。向かい合った座席の間に腹をだし、両方の座席の下へ頭と足を差し入れる。腰かけている戦友に、腹を踏まないよう頼んで寝たが、夜中に二、三度踏まれて目が醒めた。座席が低いため寝返りが打てないのは不満だったが、手足を十分伸ばすことが出来てぐっすり眠る事が出来た。

### ・吉林脱出

八月二十六日

十分な睡眠の後、朝の気配に座席の下から這い出し、窓外に目をやると、われわれの列車のまわりには物売りや野次馬の満人が沢山群がっている。饅頭、玉蜀黍、月餅、春巻、白乾児等、声高な売り声が交錯して喧しい。代金の代わりに毛布、携天、襦袢袴下等、織維品との交換が目当てのようだ。

各車輛のデッキの下にはマンドリンを提げた

た厳しい表情のソ連兵が数人入って来た。入口の方から座席に銃口を向けながら、だんだん我々の席に近づいて来る。十五、六才位の若いのが、五十を過ぎたような兵隊が何れも汚れた軍服を纏い、中には酔っぱらっている奴も居る。はじめは武器の探索でもしているのかと思っていたが、我々の座席に来た奴が、私の左手首の時計を指さして奇越せと云う素振り、回りの者も皆とらわれている。時計の他、胸に差している万年筆も。彼等のポケットは略奪した時計、万年筆で膨らんでいる。

朝鮮の銀行へ入る時、兄が記念にと買って呉れたセイコーの時計、何年もの間左手で時を刻んで呉れた大切な時計なのに。

我々の車輛の略奪を終えると奴等は次の車輛へ移って行った。何がソ連軍だ、これではまるで強盗ではないか、こんな奴等の管轄下の入ればどんなことになるのか、強いられた無抵抗に怒りがこみあげて来る。本部からは何ら命令も指示も伝わって来ない。

ソ連兵が我々の脱出を見張って居り、敷き並ぶ数本の引込線には、貨物の積卸作業中のものや、屯した沢山のソ連兵が居る。

前の車輛から、命令受領のため本部へ一名来いと伝達に、戦友の一人が赴き、部隊長の命令を受けて来る。

「戦争終結により、我が隊はこのまゝソ連軍の指揮下に入る。今後何処へ行くのか定かではないが、自分は責任上ソ連軍の命ずる通り行動する。」

ソ連軍は列車からの外出を禁止し、脱出する者は射殺するとのことである。戦争は終わったのだからこゝに復員命令を出す。自分と行動を共にしても命の保証はし難い。今後の行動は貴官等の判断に任す」とのことであった。

重苦しい静寂のあと騒然となった。私の座席のまわりに十人程の集まりが出来、右するか左するか意見がとびかった。

このまゝでも命の保証はなし、出ずれば射殺。座して奴等の意に従うか、火中に飛び込んで活

を見出すか、迷いに迷う。

為さざると嫌疑するとは……よしどうせ駄目ならやれるだけやろう、彼奴らの捕虜になどなるものかと衆議一決。

脱出する為には、変装して口助の目をごまかさねば、デッキの下のマンドリンの標的になるばかりだ。

窓の下に群れている物売りの満人から変装用の衣類を手に入れなければならぬ。窓から身を乗り出して下の彼等と身ぶり手ぶりで、彼等が身につけている上衣(ジャン)褲子(ズボン)を毛布一枚と、汚れたハットを襦袢と、菅笠をタオルと、各人思い思いの物を交換入手する。

フト横の座席を見ると将校行李が開けられて中に背広服、下着のほか私物が詰まっている。心の内で持ち主に詫びながら、背広一揃いとYシャツを無断借用して、同僚と一点ずつ分かち合う。

脱出

軍足に詰めた米、乾燥みそ、下着、水筒等を

擦れ違う度に胸はドキドキ、走り出したくなるが急いではいけない。満人らしくしなくてとは、荷を肩に上を向いて口を半分あけ、靴を引きずりながらゆっくりと歩く。

背中を見つめられている気がしてならない。いつ撃たれるか、背に神経が集中する。万一の場合を慮り、気づかれぬよう、軍隊手帳を列車の下へ投げ捨てる。

途中何度も擦れ違った動哨から誰何を受ける事もなく、プラットホーム迄あと百餘ほどの所まで来た。

後続者を待たねばならない。別の引き込み線に停車中の最後尾車によじのぼって、デッキの陰に身をひそめる。

二、三分してふと人の気配に振り向くと後ろのデッキから人が上って来た。長衣を替ったのが一人と上衣、褲子姿が一人、何れもこざっぱりした風体である。

何しに此処へ来たのか、若しや口助の手先ではないかと気が揉める。万一の時は力の続く限

襦袢にくるんで準備完了。私は無断借用のズボンに防寒襦袢(セーター)を着込み、無帽、各々が背広の上衣姿、チョッキ姿、Yシャツ姿、上衣(ジャン)姿など、最大限の変装に着換える。

昨秋、羅南の山砲兵第七九連隊へ入隊以来、今日まで苦楽を共にして来た朋友の清家候補生と手を握って再会を約し、まわりの戦友たちに別れを告げる。

脱出に気付かれればマンドリンで蜂の巣にされるだろう。私が一番にデッキに出る。

打合せ通り戦友たちが、車窓から満人に毛布、敷布などをチラつかせるときざわめきが起こる。ソ連兵はその騒ぎに気を取られてデッキに背を向けた。

今だ！デッキから地面目がけてとびおる。尻もちをつきそうになりながらすぐに満人の人込みの中に入る。歩哨は気付いていない。プラットホームは列車の遥か後方である。線路伝いに歩き出す。

ソ連軍の動哨、作業中の兵隊がいっぱい居る。

り闘うのみだ。私に話しかけてくるが、さっぱり言葉が判らない。何か質問しているようだ。無言のまゝ、見つめるより仕方がない。暫くして何か言い捨てるように二人は降りて行った。

デッキから、先程来た方を覗く。早く来てくれ、一刻も早く、長居は危険なのだ。

もどかしく待つうち、やっと一人、チョッキに軍袴、編上靴の梅原候補生だ。手をのばして引っ張りあげる。二人になれば心強い。安心して故か防寒襦袢の下は汗でグッショリ。

やがて少し、間を置いて変装姿の邑上、森川、雪、平石の同志がやって来た。後続を待ったが途絶えて姿が見えない。私ごとび降りてから三十分は経っている。先程の二人組のこともあり、これ以上此処に居ては危険だ。

出発、間隔をおいて一人ずつホームへ向かう。駅の構内は日本人、満人でごった返している。モンペ姿にリュックサック、両手に荷物を提げた子供連れの婦女が多く、みな疲労と不安の影が濃い。

やがて列車が入って来た。どの車輛もデッキまで鈴なりの満員で、とても乗り込めそうにない。何時に発車するのか、何処行きなのか判らないが、ともかく乗らなければ身が危ない。

デッキには乗り込める余地はない。どれか空いた車輛はないものかと、見回すうちに、一輛、中央部に少し隙間が見える。これに乗ろうと中の座席の日本婦人に開けてくれるよう硝子越しに手振り頼むが、首を横に振って、開けてくれそうにない。同じ日本人なのに何故開けてくれないのか、情けない。

我々は追われる身なのだ。かくなる上は強行突破の他に道なし。雪候補生だったか、車輛から持参の、繃帯を巻いて偽装した軍刀の刀身部を振り上げて、柄で車の窓をぶち破ろうと身構えると、中の婦人は驚いて手で制し、窓を開けてくれた。窓によじ登り尻を押し上げ、手を引張り合って全員混み合った車輛の中へ入る。

先程の婦人が「貴方達は兵隊さんでしょう、先刻ここで、拳銃を持っていた兵隊さんらしい

切符も無ければ、金も無い、満鉄も満人が管理して居るらしい現況で捕まれば面倒だ。相談の結果貨物の搬出入口から出ることにして人込みの中をフォーム端の貨物置き場へ行く。広い敷地は、野積みみの石炭、麻袋、梱包荷物で埋まっている。貨物の山を過ぎ、出入り口の柵を乗り越えて無事駅構外へ出る。

駅前へ出たが、これから何処とて行く当てもない。緑園へ行つたとて隊舎は既に爆破されているだろう。すると先刻の列車で知り合った日本人男性が「駄目かも知れないが、知人に頼んで見てあげましょう」と案内してくれる。

日本橋通りを東に歩む途中ジープや、巡察らしく、マンドリンを胸にしたソ連兵と幾度もすれ違う。一軒ほど歩いて右へ曲がって、すぐの「キムラパン」店に着き、厚い板で閉ざされたドアをノックするが、いくら叩いても内からは何の応答もない。駄目だ。案内してくれた人はそのうち去ってしまった。

日暮れの街は、どの家も窓という窓は全部、

人がロシア兵に射殺されたから、武器は捨て、下さい。時々回って来て危険です」道理で開け波っていたのだ。軍刀を座席の下深く隠す。

身動きも儘ならぬほど詰めこんだ列車は、やっと動き出した。先ずは一安心、モンペの婦人に尋ねると、この列車は新京行きとのこと。十四日から炎天の陽に晒され、雨に叩かれて六日間昼夜歩き続けた路を今度は汽車で出発点の新京へ逆戻りである。

汽車の揺れに身を任せている内、青い作業服に、満鉄の略帽を被った満人が、人ごみを掻き分けて検札しながら我々の所へやって来た。

切符は持っていないと云うと、買えと云う、皆でポケットの金を出し合っても一円、五円が数枚と銅幣が十枚ほどしかなく、誰も全員の切符を買うだけの金はない。買えと云われても無い袖は振れぬ。「新京へ着いてから買う」と言っただけで、諦めたのか行ってしまった。

吉林——新京間一三〇駅、無賃乗車でやっ

と汽車は新京駅へ到着した。

外から厚い板を打ち付け、入口の扉も全て板で閉じて灯もなく静まり返っている。

途方に暮れるとはこの事か、「困った時は小便でもして、考えよう」との声に全員が一行横隊で角の倉庫の壁に向かい「砲列を敷け！目標前方の敵、撃て」と、不安を冗談に紛らわしてやっていると、後ろの家の二階の窓から呼びかける女の声がある。「貴方達は日本の兵隊さんですか？ そんな所に居ると口助に捕まりますよ。下を開けるから早く入りなさい」地獄で仏とはこのことだろう。

この家も他の家同様、窓、扉とも部外から厚い板を打ち付けてある。開けて貰った扉から六名、ドヤドヤと入り、扉を固く施錠する。既に屋外は暗い。良かった。

街中では旧日本兵らしい者は口助に捕らえられて収容所へ入れられているとのこと、運良く助けて頂いて良かった。只々感謝、感謝である。

ホッと一息、昨日迄の凜々しい候補生の姿は何処へやら、支那服姿、洋服姿、チョッキ姿、

才迄の男子は病人を除いてみな召集されたまゝ、口助の收容所に入れられたので、男の人が居る家は殆んどない。

口助が日本兵狩りをしているので出歩くのは危険である。また昼夜を分かつた一般民家に押し入り、金目なものを強奪し、女性を犯すので恐怖の毎日が続いている事など、火事場泥棒みたいな侵入して来て勝手気儘に傍若無人の振舞いをして居る奴等に怒りがこみ上げて来る。

この辺りの家は、一区画が十軒ばかりで構成されている。三、四軒一棟の棟がコの字形に並び、各家の裏口はコの字の内側に向き、そこは各戸共通の内庭となっている。コの字の開いた部分は高い塀で塞がれ、その一部に区画外へ出入りの潜り戸が設けられている。この潜り戸を出入りする時は、中の誰かに立ち合せて貰って施錠を忘れないこと。

口助が玄関や裏潜り戸等から侵入しそうな時は、空缶やバケツを内庭に向かって叩き、近所へ危険を知らせる事など、口助襲来対策も教え

られた。

奥さんが近所の家へ我々の事を話したのでろう、男手がなくて不用心なので、引取希望があり、邑上、森川両候補生は北隣の甲斐さんへ、平石、雪両候補生は日本橋通りに面した原田眼鏡屋さんと御世話になることとなり、あと大阪出身の梅原候補生と私は当分、阿知波さんの御世話になることとなった。

八月三十日  
第一次南下

御世話になりだして二、三日経った頃、奥さんから「明日、朝鮮行きの列車が出るそうだと聞き梅原候補生ともう一人と私の三人で南下することにする。新義州まで行けば伯父が居るし、勤めて居た朝鮮殖産銀行の新義州支店もある筈だ。どちらかへ行けば後は何とかなる。」

亡き御主人の服などを貰い、一般人の姿となる。途中危険だったら何時でも帰って来なさいと云う奥さんの言葉に送られて出発する。

真冬の防寒セーター等まるで仮装行列か田舎芝居の一座だ、だがこの姿が我々を口助の目から救ってくれたのだ。感謝しなければならぬ。

みな軍足の米を取り出し、炊いて頂くようお願いして、好意の風呂に入れて貰う。のんびりと五右衛門風呂に入るのは何カ月振りだろう。立ちのぼる湯気がほのぼのと心まで温めてくれるようだ。溜まった垢を落としたあとの気分は何にも替え難い。

畳の部屋、電灯のもので、奥さんと娘さんの心づくしの御馳走だ。茶碗に白飯、木碗に味噌汁、沢庵、箸も割箸である。アルミ食器とは異なり、物心ついてから馴染の食器に、軍の規律の枠からいっぺんに飛び出した開放感を体いっぱい感じる。

ソ連軍から脱出した安堵感と日本間、日本食、みなが何杯もお代りする。

「風呂に入って、茶碗で白飯を食べて、畳の部屋の布団で寝れば満足だ。もう死んでも良いな」等と冗談もとび出す。

手分けして食器を片づけ、二階から布団をおろして部屋一杯に敷く。「口助が入るといけなから、不寝番を立てようか」と云う声もあったが、口助が来る迄は寝ようと、久し振りの布団の上に手足を伸ばす。

窓一重で、外は道路だ。口助が入って来たらどう対処するか、などと考えている内に深い眠りにおちる。

八月二十七日

幸い口助の侵入もなく、久し振りに布団の上で充分な睡眠がとれて、爽やかな朝を迎えた。朝食のあと、奥さんから色々新京の現状を聞く。

この家は「太信號」と云う化粧品問屋であったが、御主人は先般亡くなられ、現在は奥さん、阿知波順子四十才、娘さん光子、敷島高女三年生の二人家族。場所は日本橋通りを南に入った朝日通りに近い所、近くに満鉄病院がある。周辺は日本人の居住区であるが、八月十日に五十

ロ助が胸元にマンドリンを突きつけてきた。日本軍人と見破られたか、逃げればこの人混みの中でも発砲するだろう。若し連行されたら次の策を考えよう。兵隊は右手を引金にしてはいるが、顔つきは余り厳しくはない、私に左の掌を差し伸ばした。まさか制服の兵隊が金を？ と思ったが、今朝饒別にと貰った何枚かの紙幣を差し出したが、それでは不足らしい。不意に私のチョッキのポケットに指を突っ込んでしまったかと思つたがもうおそい。後生大事に持っていた候補生の座金と曹長の襟章をつまみ出し、私の顔と見比べている、顔から血の気が引く。連行されては身元がばれてしまう。駄目かとは思つたが襦袢の包の中の煙草「北海」十個ばかり、全部取り出して渡すとポケットへねじ込んで去って行った。日本兵狩りでなく、背広を着た私が余程鴨に見えたのだろう。

傍らに梅原候補生しか居ない。他は単独行動をとつたのだろうか。二人で行動することにする。待合室は座る場所も腰をおろす場所もない

程の混みようで、今夜こゝへ泊まる事は出来そうにもない。

僅かな街灯のもと、駅前広場に四、五百人程が円形を作って座り込んでいる。聞くと、今夜こゝで野宿する朝鮮人引揚者達で、女子供を中心に、周囲は男達がとり巻くように座っている。彼等と一緒に安全だろうと外側に座り込む。

夜の冷気に膝を抱えて仮眠していると、夜も大分更けた頃「ワァッ」と云う叫び声。ヤマトホテルの方からこの集団目がけて、棒切れを振りかざした満人の一団が略奪に襲来したのだ。集団の荷物を奪おうとする奴と外廊を固めた男達との殴り合いが始まり、女子供の悲鳴があがる。と突然「パパーン」と小銃を空へ放ちながら数人の男が走って来る。襲来した満人達は蜘蛛の子を散らすように逃げ去って行った。略奪者達を追っ払ってくれたのは八路軍らしい。朝鮮集団の被害は大した事は無いようだ。

安心して眠りに落ちるとすこしして又「ワァー」と襲って来る。そして銃声で退散する。若

新京駅は待合室もプラットフォームも人でゴツタかえしだ。リュックサックを背に子供の手を引いた人、老人を連れたモンベ姿の人で溢れている。混雑に紛れてプラットフォームに出、人込みに揉まれてる内に超満員の列車が入ってきた。

車内は立錐の余地もない程で、デッキはおろか屋根の上まで、日本人、満人、朝鮮人で溢れている。無理してでも乗らねばならない。屋上の日本人に頼み、手に縫ってよじのぼり、僅かな隙間に腰をおろしたが、中央の安定の良い所は満人、朝鮮人が座を占め、日本人は丸みのある端の方しか腰をおろす所はない。汽車の屋根に上つたのはこれが初めてだが、丸く勾配がついているので甚だ具合が悪い。手をかけられる所、足を支える所を探して安定を計る。

フォームには沢山の日本人婦女子が、みな放心した表情で、置き去りにして走り出す列車を怨めしげに見送っていた。

転落の心配で強張っていた体も漸く振動に慣

れてくる。炎天下の向かい風は頬に気持ち良いが、風向きによって機関車の黒煙が目覆い、口に当てたタオルを通して入る煙に、喉はいがらっぽく、手も顔も汗と煤にまみれてベトベトになる。停車した駅は何れも荷物を背負った日本人で一杯だったが、超満員の列車は、ただ置き去りにするしかなかった。

途中、近くの人が、背をのぼしていて気付かず、トンネルの入口に頭をぶつけたが、幸い眼鏡をとばし、僅かな怪我をただけで、転落は免れた。

トンネルの中では煙に捲かれて息を詰め、カーブでは振り落とされまいと必死にしがみつき、急停車には精一杯脚を突っ張り難行苦行が続く。曠野に陽が沈み、夜風が肌に染む頃やっと奉天駅に着く。この列車は奉天どまりとのこと、フォームは列車を待ち続けている人達でこつた返している。

新京——奉天間、約三百軒、屋根の旅に疲れた体でフォームへ降りて歩み始めた途端、若い

し私等の場所が襲われると危険だからと、二人で駅の引き込み線の空の列車に乗り込み、口助の危険を避けるため、網棚に身を横たえる。

寝入ったかと思う頃、ドアが開き、「哀号！哀号！」と泣き叫ぶ朝鮮人の女を引っ張って、口助が入って来た。座席へ押し倒された女は諦めたのか暫くして叫び声は静まった。日本人だろうと朝鮮人だろうと見境なしに勝手放題、狼みたいな奴等だ。

こゝも安全ではない。空の客車をあとに再び朝鮮人集団に入り、仮眠のうちに朝を迎える。

八月三十一日

駅は昨日同様、南下しようとする人達で溢れている。時折入って来る列車は、何れもデッキ、屋根に至るまで鈴なりで誰も乗り込める余地はない。たまたま北行きの列車を待っていると云う一団の人達の話によると、自分達は朝鮮へ行くため、安東まで行ったが、鮮満国境は、朝鮮人の検問が厳しく、日本人は入れてくれないの

の汽車だ。イルボンサラミは降りろー凄じい剣幕で押し返す。無理は承知、腹の虫を抑えて手を合わさん許りに頼み込み、やっとボスらしい奴の諒承を得た。だがデッキは満員だから便所に入って行けと云う。怒る梅原候補生に、鴨緑江を渡る迄だから我慢しようとなだめて狭い便所へ入った。

中は窓の下が少し空いているだけで蒸れるような暑さだ。女が子供を連れて入って来たので通路へ出る。中が終わると入れ替りに入る。便器には糞便がへばりついたまゝ、水洗の紐を引っ張っても水は出ない。排泄物の臭いが充満した蒸し風呂のような密室、流れ出る汗に頭がポロロとなりそうだ。長い忍耐の後やっと発車。幾度便所への出入りを繰返しただろう。

気が遠くなる程の時がたって、大きい駅に着く。僅かな窓の向こうの貨車のまわりをカーキ色の服の兵隊が右往左往している。外の朝鮮人達の会話の中に「パロー」と云う声が聞こえる。

走行中はまだ僅かな隙間から入る風に紛らわ

で、止むなく新京へ引き返す途中のこと、これでは南下しても致し方ない。折角屋根の上で辛抱して来たのに、とは思うが安東まで行って引き返すよりはまだまだだ。長い間待った後、北行きの列車に乗り込み、新京へ帰りつく。戻り難いが、他に頼れる所とてなく、再び阿知波さんの御世話になる。

九月二日

第二次南下

朝鮮人の引揚列車が出るそうだが、と奥さんが聞きこんだ。梅原候補生と決行をきめる。引揚列車に潜り込んで沈黙を続けて居れば何とかなるだろう。話かけられたら私の片言の朝鮮語で乗り切られるだろう。

新京駅で待つ程に、朝鮮人を満載した列車が入って来たが、デッキにも立っている。梅原候補生には一言も物言わぬよう、急押しをして無理矢理デッキに乗り込んだが朝鮮人の腕章をつけていないのと、早口の朝鮮語に応答出来ぬため身元がばれてしまう「これはチョンサラミ

染み込んだ臭いから解放されたい。こゝも矢張りリュックサックを背負って子供の手を引き、荷物を持ったモンペ、ズボン姿の日本人婦人で締められている。新京も、奉天も、四平も、営々として築いた財産を残して、手回りの荷物だけで故国への道を求める人達で駅は溢れている。フォームに座りこんでいる一群は安東から引き返したとのこと、新京から朝鮮へ向かったが、安東から先は朝鮮人だけしか入れず、日本人は追い返されている。武装した朝鮮人の見張りが厳しくて新義州への橋は渡れない。鴨緑江を渡ろうとして射殺された人達も居ると云うことである。

鮮満国境は日本人に対しては完全に閉ざされ

てしまったようだ。新京から約百二十軒、やっ  
とここ迄来たけれど鴨緑江が渡れなければ引き  
返すしか仕方ない。暫く後、新京行列車に乗っ  
たが、客車のドアが内から施錠されて開かない。  
ドアを叩き続ける。「日本人ですか？」との問  
に答えると入れてくれた。中は、数人の老人男  
性の他は殆んど女子供の一団である。

この一行は、新京へ残った満洲電々社員の家  
族達で、朝鮮を経由して帰国しようと南下した  
が、安東で留められ、朝鮮へ入れないので一輛  
借切って新京へ引き返す途中である。途中幾度  
か停車中満人に押し入れられ、荷物を奪われたの  
でドアに施錠している。出来る事なら新京へ無  
事に着けるよう守って貰えないかと頼まれ、ド  
ア番をする。二、三の駅で満人の侵入を防いだ  
あと、どうにか無事に新京駅に到着した。

駅前広場で馬車数台に分乗させ、荷物を掻っ  
払いに寄って来る満人を追い払いながら電々の  
社宅まで送りとどける。留守中、家族の安否を  
氣遣っていた御主人達と抱き合って喜ぶ人達の

る。長い間抑圧され続けた満人の精一杯の反撥  
であろう。

そして白昼堂々と日本人家屋に押し入って金  
品を強奪し、マダムダワイ、婦女子を凌辱して  
いるソ連兵は、主力戦団を根こそぎ欧州へ投入  
したソ連が満洲侵攻に当たって急遽、少年や囚  
人を集めて編成した部隊とも云う。

無警察状態の中に取り残され、羽根をもぎ取  
られた鳥の如く、飛び行く事の出来ない日本人  
が不安と恐怖に怯えながら生きる道を模索して  
いる。

商売をしていた日本人は敗戦と共にその店舗  
を満人従業員に取って代わられ、また五十五才  
までの男子は八月十日に召集されたままソ連に  
抑留されているため、残された老人、婦女子は  
売り食いの他に生きる道はない。敗戦国の外地  
残留者は実に悲惨だ。

### ・露店商売

奥さんから、以前商売していた頃の在庫を売

姿に、良い事をした満足感と共に自分達の孤児  
の如き境遇に、ふと羨望の眼を注いでしまう。  
行く当てもなく、再び阿知波さんに受け入れて  
貰う。

### ・残留生活

九月

試みた南下は二度とも失敗に終わり、朝鮮行  
きは当分実現しそうにない。

何時の日になるか判らないが、引揚げの日が  
来るまではこの地において自活の道を講じなけ  
ればならない。

異境の地において在留邦人の後楯となるべき  
関東軍は、口助の侵入と同時に司令部が任務を  
放棄して南下してしまったので各地の部隊は解  
散、または抑留されて、軍としての力を失い、  
一般人は口助の泥靴に踏みにじられている。

街では今まで威を振り、恐れられて居た元憲  
兵、警察官が満人の集団に襲われて殴り殺され  
たり、私刑で絞殺されたとか、厭な話が耳に入

って貰えないか、と持ちかけられる。今まで商  
売などした事はないが、やれば出来るだろう。  
吉野町辺りが良かろうと云うことで早速梅原候  
補生と出かける。

雑踏を避けて、吉野町から少し入った横丁で  
携帯天幕を敷き、リュックサックから、花王石  
鹼、櫛、小鏡、化粧品などを積み並べる。

胡座をかいていると通りすがりの満人が寄っ  
て来る。「這個多少錢 (チヤトシヤチニシ?)」「  
看々 (カシシシ)！」数人がしゃがみこんで、手  
にとり喧しく問いかけて来る。と石鹼を手にし  
ていた奴が駆け出した。持ち逃げだ、追っかけ  
ようとする他の奴等も持ち逃げしそうな気配  
に追うのを諦める。周りの満人達はニヤニヤ笑  
っている。リュックサックの中へ商品を戻し、  
売場には二、三コずつサンプルを置き商談が纏  
まった分だけ出して売る。石鹼は五個、十個と  
良く売れる。後ろのゴソゴソと云う音に振り向  
くとリュックに手をつ込んで石鹼を盗ろうと  
している。油断も隙も無いとはこのことか。

週に一度ぐらい奥さんを訪ねて来る竹田と云う四十羽みの男がいた。ほっそりした小男で頭は低いが狡猾そうな顔付きで、色々な商売をしていると云うことであった。その男から、我々二人の内一人商売の手伝いをして欲しいとの申し出があり、相談の結果梅原候補生が行くことになる。僅かな手回り品と共に住み込んで行った。場所は吉野町の元、森田書店の二階で、テーブル五卓程並べた喫茶店兼軽食の店である。一階は既に満人が占有して、餃子、焼売など飲

二人で持って来た商品は、若干の万引きはあったが半日程で全部捌けた。初日としては値段もまずまずだろう。支那語と日本語と手ぶりで掛け引きと、持ち逃げへの心配りで疲れた。天幕を片づけて靴を履こうとするとない。洗の足の痛さが油断を戒める。  
売上金の一割を手間賃だからと差し出され、一応辞退はしたが、有難く頂戴する。十日程の商いで石鹸を主とした在庫商品は全部捌いた。  
九月十X日

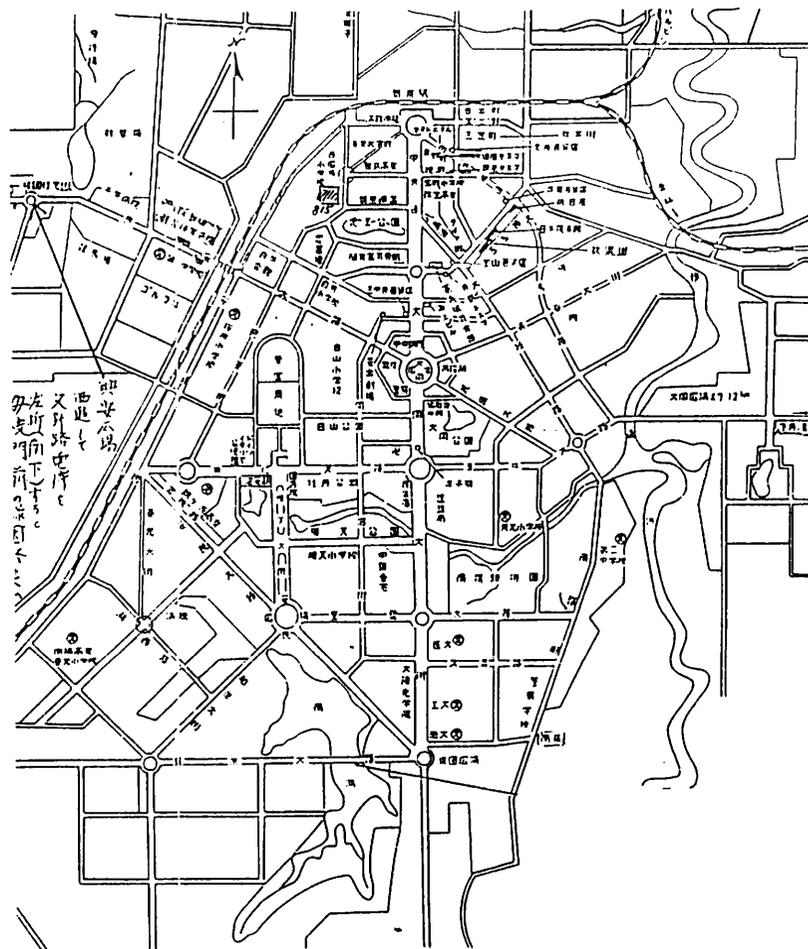
茶店を営んでいた。

・衣裳売買 (トウキョウ)

あとに残った私は奥さんと相談して衣裳買売をすることになり、先ず手始めに奥さんから出して貰った衣類をリュックサックに背負って吉野町を根城とした。雑踏の中で二、三点手にしている満人が寄って来る。「多少銭？」「看々——」しっかり握っていないと引張って持ち逃げされてしまう。木綿の浴衣や晒等白地に近いもの、幅広の兵児帯などが良く売れ、日本では高価な御召、紋服、袋帯など模様のあるものはあまり買手が付かず、値段は浴衣よりも安い。「看々——」と数人で取り巻き、リュックの中へ手をつ突っ込んで中身を引っ張り出す奴等も居て油断が出来ない。リュックを胸へぶら下げて盗難から守る。

奥さんの口コミでか、近所の家から毎日委託品が持ち込まれ、一日二回吉野町へ往復するようになつて売上も伸びる。手数料は売上の二割

昭和20年当時の新京市街図



が相場で結構良い収入となり、奥さんに食費代として御礼を渡しても手元には相当額が残った。吉野町の雑踏での流し売りは順調に続き、満人の同業者にも知り合い出来た。

衣裳買売を始めて一ヵ月余、十月も終わりに近づくと近所からの委託品も底をつき始めた。ちょうど此頃、日本橋通りの金泰百貨店が、ロ助や満人に略奪されて空になった売場を区割して賃貸することになり、ここを一画借りて裏隣りの原田さんが在庫の眼鏡を売ることになった。吉林から脱出した時、原田さん宅へ身を寄せた雪、平石両候補生は伝を求めたか、南下したのか既に居ない。

原田さんの家は八月十日に御主人が召集された後は奥さんと小学生の子供達だけで、日本橋通りに面した店舗は固く閉ざされていた。

十月二十X日

・眼鏡店開業

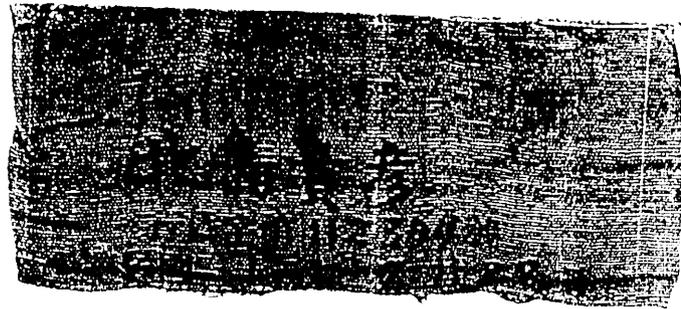
近眼、老眼、色眼鏡、縁を十コ宛入れたのを

用していたのだろうか。

近眼や老眼の客が来ると先ず視力測定表で検眼し、凡その見当のレンズで新聞を見させ、好となると選ばせた縁にレンズを嵌め込むが、セルロイド縁の場合、円筒型のヒーターの熱が高過ぎたり、押し込みが強すぎたりすると縁の穴が大きくなり過ぎてレンズが止まらなくなってしまふ。向を重ねる毎に要領を覚え、失敗がなくなる。近、遠に色眼鏡も含めて毎日五個から十個ぐらい売れるようになり、先ずは安定状態である。

夕方原田さんに売上報告、商品の補充をして、清算する。毎日の売上高の一割を手数料として貰うので、阿知波さんへの御礼も応分の事が出来たと思う。

毎日通う金泰の二階の踊り場に連合国の兵隊四、五人が銃を高く掲げ微笑んでいる絵の下に「WE WON THE VICTORY」と横書きされた豊大のポスターが貼ってあった。階段の上り下りには否応なく目に入る。目に



今瀬正夫氏が北島貴彦の偽名で登録した身分証明の腕章。いまでも大切に保存している。

東北行営日僑俘管理総處  
長京市日僑俘管理所  
北島貴彦  
行僑字第112304號  
中華民國三十五年七月28日

する度に、日本の敗戦と云う事実が身に染み渡る思いであった。

十ケース、卓上鏡、精密ネジ回し、ラジオペンチ、視力測定表、セルロイド眼鏡縁用ヒーターなど一式を揃え、原田さんの奥さんから眼鏡の分解、組立、レンズのはめ込み方など細部に渡って指導を受け、商品一個宛の値段をきめる。金泰百貨店の売場は、区画毎にガラスのショーケースが置かれ、隣とは衝立で仕切られている。売場には貴金属店、支那服、洋服地、時計、カメラ等の店が並び戦前の百貨店並の様相を呈している。

私の店の右隣りは刃物屋、左は革靴の店で、靴屋の掌櫃(ジャンゴ)は張と云う四十才位の恰幅の良い親切な人だった。

客は専ら満人が多いがソ連の将校の姿も見られ、戦勝の気分もあつてかどの店も景気は良さそうだし、またロ助の強奪や満人の略奪もないので身は安全だ。

時折水晶のレンズはないか、と云う客が来る。硝子に較べて明るく、曇らないとか、今迄水晶のレンズなど聞いた事もなかったが金持ちが使

・白熊シューバの君

開店後間もなく隣の靴屋へ白いシューバを着た若い日本人女性が勤めるようになった。

毎日顔を合わせている内に、この人は北海道で牧場を経営している人の娘で、新京から二時間ばかりの街に満鉄社員の兄が居ること、そして彼女は満映の女優だったが敗戦となったため知り合いの伝手で張さんの店へ勤め始めたことなどが判る。美人だから張さんの二号さんか？との私の推測は外れ、真面目なしっかりした人（Aさん）ということが判った。

ある日、仕事を終わって片付けしている時、階段の辺りの言い争う声にふと眼を向けると、長袖を着た若い男が嫌がるAさんの袖を引っ張って無理に連れて行こうとしている。男はこの間から度々隣へ来てAさんに誘いの言葉をかけていた背高・リーゼントスタイルの奴だ。

敗けたからといっても見逃す訳には行かないとんで行ってそ奴の手を払い、Aさんを後ろに

庇うと、その男は喚きながら掴みかかって来た。

日本人を舐めるな！とつい力が入る。突然人だかりを分けて、揉み合いの中へ靴屋の張掌櫃が分けて入るなり、長袖の男を大声で叱りつけた。男は二言、三言ブツブツ呟くと肩を張りながら去って行った。

「あれは自分の倅だが、若いのに店も手伝わず毎日遊んでばかりで困っている。先刻は本当に済まない事をした。二度とあんなことはさせないから許して欲しい」と張さんが詫びる。張さんも満人監視の中で、日本人である私に詫びるのは勇気のいる事だったろう。

それから後は、張さんから御茶や菓子をご馳走になる事も度々あって、満人の出店者達から差別や侮辱的な言動を受ける事はなくなり、長袖の倅も寄り付かなくなった。

・腕時計

吉林の車中でも腕時計を強奪したのか、口助は余程珍しいらしく、街では盗った時計を五

六個も巻いた兵隊をよく見かける。路傍に小机を置いただけの日本人時計屋で、針の止まったウォルサムやオメガなど、高級腕時計を修理して貰っている。壊れていないのに高い修理費を払って、ネジを巻いただけで動き出した時計を大事そうに腕に巻いて行く。彼等はネジを巻くことを知らない。中には止まったロンジンと動いているセイコーの時計を交換した上に金を払って行く者もある。傍の満人達は指で頭を指さしてニヤニヤ嘲笑っている。

満人もドサクサに紛れて侵攻して来てわが物顔に振る舞う彼等を露毛子（ルーマオズ）・大鼻子（タービーズ）といった嫌い、好感は抱いていない。

・軍票

口助達は買物には実に金払いが良い。若い兵隊でも拾円・百円の赤い軍票の束を出して気前良く使う。受け取りを拒むと口助に捕らえられ。悪貨、良貨を駆逐すの諺通り、中銀券は鳴

りを潜め、表面に「蘇聯紅軍指令部、為一切支付必使用、一九四五年」と印刷された赤い軍票が横行している。誰もババ札を最後に手にしていたくないのだろう。

・日本兵売り

眼鏡店で黒眼鏡を買ってくれた日本人と親しくなり、時々訪ねて来るようになった。彼は特攻隊上がりと言っていたが常に長袖をまとい、懐中にはブローニングを忍ばせていた。「日本人でありながら口助の日本兵狩りに協力して日本人を売っている奴がいるから気をつけろ」と注意をしてくれた。私はハルビンに於ける口助の徹底した日本兵狩りの話を聞いていたので、以前から万一口助に捕まって、彼等が押収したとされる関東軍の名簿で照合されてもばれないように名を北島貴彦・十八才と名乗っていた。

日本人が日本人を金のために売るなど許せない事だと、二人でその男を満人街に訪ねたときはあいにく不在であったが、後に彼が一人で訪



の色が走った。人から物を恵まれるような境遇ではなかった人が、見ず知らずの同胞から施しを受けたときの気持ちはどうだったのだろうか。私がした事は良かったのか。人の心に深い傷を負わせたただけだったのか。ただ、帰国するまでは母子共に生き延びて下さい、と願うばかりである。

・国府軍入京 十一月二十五日

金泰で出店者達から聞いていた通り国府軍が入ってきた。鉄路移動してきたのか、徒歩部隊が多く車輛は少ない。木綿の軍服の者、羅紗服の者、服装もまちまちで、武器も小銃が主で装備は良くない。中には三八式歩兵銃を持っている者もいる。寄せ集め部隊のようで、余り強そうではない。ソ連軍撤退の様子も聞かないから両軍が共存するのだろう。街のあちらこちらの壁に、進駐して来た司令官と長春市長の布告が貼り出されているが、人だかりがする程もなく、ほとんどは一瞥して通り過ぎていく。新京では

なく長春市という呼称に、ここは日本から遠く離れた外国だと言う事を今更のように感じる。国府軍が入ってからは、面子を気にしてか規律が厳しくなったのか知らないが、口助の暴挙振りには少し減ったようである。

・難民収容所 十二月××日

寒さはいよいよ厳しさを増し、雪は固まって根雪となり、舗装したかのようにきれいになった。昼間溶けた表面は夜の冷えて凍りよく滑る。辺地の開拓団の人達や掘り所のない人達の収容所となっている小学校の惨状を聞き訪ねた。校舎に葎や毛布を敷いた上に沢山の老人、婦女子が起居している。廊下や教室の床板が剥がされ、土がむき出しの場所や、窓ガラスのない所もある。満人が燃料にするため板を持ち去ったという。窓を覆う葎が吊ってはあがるが、とても零下三十度の寒さを防ぐ足にはならない。着のみ着のまま辺地から出て来た人達にとっては着替えもなく、風呂とてままたぬ状態では

衛生状態は極めて悪い。虱の媒体で次々と発疹

チフスにかかり、毎日何人も人が息を引き取って行く。寒さが厳しくなるまでは遺体の埋葬は出来たが、寒期の凍土は鋤をも弾き返して墓穴を掘る事さえも出来ず、郊外の墓地に裸同然の遺体を野積みにする事しか出来ない状況である。校舎の傍らで、裸同然の瘦せ細った硬直死体を、大八車に何体か積んでいる。着ていた衣類は、残った人達の寒さを防がなければならぬ。悲惨さに熱いものが込み上げてくる。満人が子供を買いに来るとも聞く。

王道楽土建設の美名のもとに故郷を後にした開拓団の人達、敗戦の日を境に、それまで粒々辛苦耕作した土地を追われ、満人の略奪に泣き、口助の襲撃の恐怖におののき、無一物になって辿り着いた人達の上に厳しい冬將軍が襲いかかっている。どうすれば良いのだ。懐中の金を全部難民の一人に渡して重い心で収容所を後にする。

・口助襲撃 十二月二十×日

年も押し詰まった日の夕刻、梅原候補生が訪ねて来る。引き揚げが始まるまでどうして生きていくか、現状打開の道はないか、話し合う。国府軍の進駐以来、幾分減ったとはいえ、口助の暴虐は続いている。二・三日前にも近所で押し入ってきた兵隊たちに奥さんが主人の前で輪姦され、翌日夫婦心中した事など、話すうちに、先日の難民収容所の惨状も絡んで、鬱積した怒りのはけ口を何処に求めるか論じ、結論は口助をやっつける事に到達した。

一般人の夜間外出は禁止されていたが、目標は口助の夜間の動向。武器は彼が持ってきた短刀と家にある木刀。小路で待ち伏せして、来た奴を彼が木刀で頭を打ち、私が短刀で胸を刺す。死体は満鉄病院前のマンホールへ投棄する手筈である。

みなで夕食を共にした後、奥さんには告げず二人で裏口を抜け出し、満鉄病院の方へ向かう。

路は凍てつき、空高く上がった月の光を路傍の積雪が青白く明るく照り返している。顔が痛くなる冷たい静寂の中に、二人の踏み砕く氷の音だけが両側の家に反響して、ガリガリと大きく音を立てる。

幾つかの四辻を経て、曙町近くの四辻まで来たとき、辻の左路から氷を踏み砕く力強い軍靴の音がすぐそこに響いて来る。声高の話し声は正しくロシア語だ。動哨に違いない。両側に家の立ち並ぶ幅三メートルの狭い路では隠れる場所とてなく、逃げれば追いかけて来るに違いない。必死の思いで辺りを見回す。左側に長く続いている煉瓦塀に、深さ三十センチほどの潜り戸の凹みが目に入った。彼の袖を引張って潜り戸にピッタリと背をつける。どうぞこっちへ曲がらないでそのまま真直ぐに行ってくれと懸命に心に念ずる。だが辻まで来た二人の足はこっちへ曲がって来た。肩から吊ったマンドリンを小脇で水平に構えた奴と、小銃を肩に吊した奴

と二人、目の前四・五メートルの所を大声で話し合いながら靴音高く氷を踏んで来る。やっつけるには二人を同時に叩きつけねば効果はない。ましてマンドリン+小銃に対して、木刀と短刀ではどう見ても勝ち目はない。失敗すればマンドリンで蜂の巣にされるのが関の山だ。

「出るな」と彼を押しとどめる。その弾みてズボンの内側へ差していた短刀が股の間を通過してコトンと地面に滑り落ちた。「聞かれたか」と背筋に戦慄が走る。だがその音は彼等の足音に消されて耳に届かなかつたらしく、氷を踏み砕く足音は停まらない。月光を受けた若い二人の兵隊の顔が目の前にはっきり見える。少しでも彼等が視線を移せば、塀際の我々はすぐに見つけられてしまう。息を殺し、目を一ぱいに開いて「どうぞこちらを向かないでくれ」と祈る。彼等に聞こえるのではないかと思うほどの大きな音を立てて心臓が鼓動し、こめかみの辺りが破れそうな脈動を続ける。

口助は月光に横顔を晒し、声高の話し声と、氷を踏み砕く音を立てながら真前を通り過ぎる。振り返りもせず話し声と靴音は遠のいていく。もし潜んだのが路の右側であつたら、彼等が曲がったとき、真直ぐ目に入っていた筈である。口助の足音が消え去るのを確かめて月光を避け、足音を忍ばせて家へと辿り着く。二人とも物を言う元気もない。

「二人とも何をしたの？真っ青な恐い顔をして！」と奥さんに問い詰められるが何も答えられない。傍で光子嬢が心配そうに二人を見つめている。「何事も無かつた」と言いながら胸の鼓動は何時までも静まらなかつた。

\*実行を急ぐあまり計画がずさんであつた。

- 一、武器の準備が不十分である。
- 二、月明りの夜は避けるべきである。
- 三、やっつけた後、死体を投げ込む予定のマンホールは蓋が凍結していて使えない。

四、動哨は二人一組であることを考えていなかった。等々

十分な計画を練らず実行に移した行動は反省すべき点が多く、次回の実行に当って参考となる事項が多かつた。

その後、吉野町の竹田の喫茶店へ移つてから、金泰百貨店で眼鏡店をしていたとき知り合つた長袖の日本人某と幾度か行動を共にする。彼が何処からか調達してきた彼と同型のブローニングは、ズッシリと重く力強く、そして的を外すことなく正確であつた。その頃、口助を一人殺すと近くの日本人二十人を銃殺するという口助のお触れが出ていた。日本人に害が及ぶようなことになれば、志に反した結果を招くことになる。

凍てつく暗夜、上衣、禪子、地下足袋に身を固め、市内の地理や口助の動哨、歩哨の動静に詳しい彼の先導により、日本人街を離れた遠く

まで夜陰に乗じての出撃は、寒さと恐怖心との命がけの戦いでもあった。

・二十一年元旦

梅原候補生新年の挨拶に来訪。阿知波さん母娘の心尽くしの重詰、お屠蘇に日本を思い、敗戦後、生きて正月を迎えることが出来る幸せに感謝すると共に、遠い故郷の家族に思いをさせる。濃厚酒をお湯で倍に割って飲む。戦後初めての日本酒は胃に沁み、手作りの正月料理に、今まで幾度となく迎えた正月の一コマづつを懐かしく思い出し、話に花が咲く。

街では終戦時満人が関東軍倉庫から略奪した濃厚酒を露店で沢山売っている。

日本軍の物を満人が奪い、そして日本人がそれを買い求める。奇異な感じである。

・交 替 一 月 五 日

故あって梅原候補生と交替、彼がこっちへ入

り、私が吉野町の竹田経営の軽食喫茶へ行く。道路から一メートル幅の階段を上るとすぐ、道路側の十坪ばかりの部屋に数脚の卓子、椅子、電蓄を置いた喫茶店。メニューはコーヒー・ココア・カレーライスなどでさほど手の掛かるものはない。

その部屋に並んだ奥の十五畳ほどの部屋に竹田夫婦と、敗戦まで満鉄のタイピストをしていた若い女性が二人。二人とも本名を名乗りたくないのだろう、都城出身で体格のよいほうがベーシヤ、温和しくポツテリした方がマーシヤと名乗っていた。竹田の知人の紹介で喫茶店の手伝いをしているが、長い間目に触れる事なかった彼女等の洋装姿が二人を一層引き立たせている。

廊下を挟んで裏側は、三十坪ほどの倉庫で、棚にはたくさんの本や紙類が積まれたまま残っている。私の城は、この倉庫の隅にある。事務机を十脚ほど並べた上にダンボールや洋紙を敷

・日本人新聞

き、側面は大きい書棚が壁となり、入口は毛布を吊り下げ、石油箱を踏み台代わりにした、高架、密閉型の部屋で、電灯もなく中は万年床である。

倉庫の住人は、倉庫内の紙、文具類を露店で売り捌いている竹田の親族三名と、食堂の炊事の女性二名、三十才ぐらいのS子と、昨春九州で結婚後間もなく夫が召集され、たまたま新京に居る義姉が出産したため七月に手伝いにきて

そのまま残留の囊き目にあつた二十才ぐらいのK子である。も一人、奥地の開拓団から着のみのまままで新京へ向かう途中乳幼児を亡くし、残った五才ぐらいの男の子を連れて下働きをしているTさん、それに私を含めて八名である。

私は、階下からバケツで石炭を運び上げたり、焚き付け用の割り木作り、皿洗いなどの雑務や食堂・露店の売上、食料の仕入など、収支記帳と現金出納が主な仕事である。

国府軍の進駐以後少し町が落ち着きを取り戻したようだから日本語新聞を出そうと竹田が発案し、元新聞記者の川上さんという五十がらみの人が住み込んで編集に当つた。

「日本人新聞」という名称だつたらうか。記事は難民収容所の状況や、国府軍や市の布告、ときおり手に入る十日も前の日本の新聞からの抜粋のほか、倉庫の中の本から書き抜いた諺などで埋めた。

夜は倉庫の裸電球の下に集まり、麻袋の中の米を机の上に拵げて、中に混ざつた砂礫や粟・稗などを撰別する。どこから入手した米か知れないが、夾雑物が多く、時には鼠の糞の混じっていることもある。その米は明日の我々の糧であり、また、業務用に使う米でもある。内地の話に花を咲かせながらの撰別は楽しい一刻である。

撰別を終え、次に川上さんの原稿を元に鉄筆

でガリ版を切る。羅南の原隊で、連隊本部の使役に行き、連日年間演習計画書のガリ版切りをした事もあった。

B4版の臘紙に、小さい字で二時間ばかりもかけて書き上げた原紙をセットし、ゴムローラーで一枚一枚丁寧に刷りあげる。丁寧にガリ版を切っても、百枚も刷ると原紙に切れが入ってしまう。刷りあがったのを乾かすため拵げたまま、床へもぐり込むのは毎晩一時か二時になる。

人通りの多い昼頃、街頭に出て一枚十円か二十円で売りさばく。日本の新聞の転載記事が日本人に珍重がられ、毎日買いくる常連も出来たが、ニュース源が乏しいために記事が単調になったことが禍して、せつかく夜遅くまでかかって作った新聞も、焚き付けにしかない売れ残りが多くなり、一カ月ぐらいで消滅した。

### ・開拓団の子供

Tさんの五才ぐらいの子供が母親を見る目は

通常の子供が親に向ける甘えた目ではない。いつも母親との間に間隔を置き、上目遣いにジッと警戒の目を向けていて、呼ばれても近くへ寄って行かない。不審に思い、その原因を尋ねた私に、Tさんは涙ながらに話してくれた。

開拓団で共に働いていた夫は召集され、あとはこの子と乳飲み子を抱えて女手一つで営農に励んでいたが、敗戦とともに満人に追い立てられ、開拓団全員一団となって新京を目指した。途中幾度も満人に襲われて、目ぼしい物やわずかな食糧も奪われ、飢餓状態の逃避が何日も続いた。昼間は森や高粱畑に身を潜め、夜はリダーに従って歩を進める。飢えに泣く子の声は満人に気付かれるから始末するよう強制されて、乳房で乳児の口を塞いで息を止めた人や、這い回る児をわざと崖縁へ置いて、わが子に別れを告げた人もあったという。

Tさんは出発後数日して、乳のでなくなった乳房を口にしたまま息を引き取った子供を埋め、

残ったこの子はどんな事があったても生き延びさせねばと固く心に誓ったという。

「初めのうちは背負っていたが、飢えの身にはいつまでも続くはずがなく、子供の手を引っ張って歩かせる事にしたが、子供も空腹のため歩かない。心を鬼にして棒切れで子供を叩いて前を歩かせ、止まった子に追いつくとまた叩いて歩かせた。初めの内は叩かれて泣いていた子も追われる恐さに、自分が近づくのと逃げるようになり、あたかも鞭で牛馬を追い立てるようにして、やっと新京へ辿り着く事が出来た。だが子供にはいくら事情を説明しても判って貰えず、自分を恐れて近寄ってくれない。この子にとつて、私は母親ではなく恐い鬼に見えるのでしょ。」「幾度も声を詰まらせながら語ってくれた説明で、やっとその訳が判った。

可愛いわが子を鞭で追い立て、歩かせた母親の辛い心の内と、優しかった母に訳も判らず叩かれ、遂にはそれが母に対する恐怖心となって

焼き付き、閉じてしまった幼い心を開くにはどれだけの時間がかかる事だろう。

戦争の醜さ、生きる事の醜さに涙する。

### ・竹田の売春強要

S子やK子の話によると、竹田の部屋にはウオッカ・ウイスキー・ハム・カルパス・缶詰などが豊富に積んであるという。

時々竹田を訪れる口助が持ってくるらしい。若くて背の高い将校と、も一人は背のずんぐりした兵隊の二人である。

ある日二人が来ている時、ペーシャとマーシャが竹田に呼ばれて部屋へ入って行った。マーシャは中で飲まされているのか、水や食器を取りに出てくる度毎に顔の赤らみが増してくる。

その夜おそく、口助二人は酔払って帰って行った。

翌日K子の話によると、ペーシャとマーシャは、飲めぬウオッカを竹田に強いられたうえ、

酔って挑みかかる口助から逃れようと抵抗しても、竹田夫妻は助けるどころか、ただ笑って見ているだけで、遂には二人とも、口助に踏みこじられてしまったとの事。竹田が二人を食堂で使ったのも、当初からその下心があったからなのだろう。

その日以降二人の口助は、三日にあげずやって来ては竹田の部屋で乱痴気騒ぎが始まり、二人とも朝帰りすることもある。時折ペーシャやマーシャが顔を火照らせ、スリッパにセーターを羽織っただけの姿で水を取りに出て来るのを見ると、目を背けたくなる。

竹田は口助から相当の金や品物を受け取っているらしく、ブローカーを使って、売食いをしてる日本人から金製品や宝石などを買い集め、夫婦とも、金の腕時計や、宝石の指輪を誇らしげに身に付けるようになった。

どのような境遇にあっても禿鷹のように貪り、金儲けをする奴がいるものだ。

#### ・衣裳売買再開

竹田の所では、食・住については心配ないが、収入がなく、煙草銭にも事欠くので余暇を利用して衣裳売買を再開することにした。

K子の助言により、K子の義姉の近所の人達の品物を扱う事になったが、女子供ばかりの家では売食いの他に生きる道はないので、品物は潤沢に入って来る。仕訳した品をルックに詰めてすぐ近くの路上で流していると、次々と満人が寄って来る。値切って来るのに応じないと去って行くか暫くすると、またやって来て少し良い値をつける。幾度かの繰り返しで遂には当方の言い値で買って行くが、根気くらべの駆け引きが面白かった。

根雪は残ってはいるが、晴天続きで毎日の商売は順調に進み、活況を呈してはいるが、毎日汚れ臭い綿入大衣の満人達と喧噪の中で渡り合っていると、自分が段々と彼等の社会に馴染んでいくような気がする。

売上手数料二十％は生きて行くには充分な金額で、K子から頼みこまれて渡すようになったK子の義姉母子（五才と乳児）の生活費も毎月渡す事もでき、時には難民収容所へいくばくかの金を届ける事もできた。

#### ・大同大街界限 新京神社

戦争中は国威発揚・武運長久の拠点として崇拜され、軍・民ともに参詣の絶えなかったこの神社も、詣でる人も無く、拝殿・本殿も荒れ放題で、半年前までの荘厳さは消え失せ、傷ついた姿を寒空に晒している。

戦時中、礼拝を強制された満人の恨みが、そうさせたのだろうか。

#### ・忠霊塔

関東軍司令部の西に隣接する忠霊塔も荒らされ、扉が壊された納骨所の辺りには遺骨箱や遺骨が地面に散らばっている。遺骨を拾って箱に納めるが、一面に飛散した遺骨はとても拾い切れるものではない。

王道楽土建設の名のもとに、尊い犠牲となつてこの地に散つた、多くの英霊は報われることなく、このような惨状の中に放り出されている。涙して手を合わせるのみ。

#### ・難民収容所

マイナス三十度。寒さの強まりに従って死亡者が増加し、郊外の墓地は、日毎に死体の山が大きくなっていると聞く。寒未だたけなわ、まだ厳しい寒さは当分続くだろう。この寒さを追い払ってくれる春の訪れの日も早からんことを祈る。

#### ・二十一年二月・三月

#### ・白熊シュエーバの君（Aさん）

粉雪の降りしきる寒い日、梅原候補生からAさんが私を探しに来ていて、という連絡を受けて金泰百貨店へ赴き久方ぶりに再会する。木綿の綿入上下服を着、顔に薄く煤を塗った彼女は、とてもあの靴店で見なれたシュエーバの君とは思えない。金泰の靴店は、一月末に辞め、現在は

新京の南、汽車で二時間ばかりの街で、満鉄へ勤めている兄一家と共に暮らしている由。今朝、八路軍地区の街から男姿に身をやつし新京へ出て来たとのこと。

街は八路軍が支配しているが、治安は悪くなく、兄は敗戦の後も満鉄に勤めているので生活は安定している。兄一家の承諾を得て貴方を迎えに来たから是非、兄の所へ行って一緒に生活して欲しい。もし内地への引き揚げが実現したら、父が経営する北海道の牧場で共に暮らしたい、との唐突の申し出である。

八路軍地区から国府軍地区へ単身危険を冒して男姿に身をやつし迎えに来てくれた真情に感動し、涙が出るほど嬉しかった。

だが、フトしたきっかけて毎月生活費を渡すようになったK子の義姉一家は私に頼り切っており、私が居なくなれば幼子二人を抱えて路頭に迷うことになりかねない。安定した生活は欲しいが、見捨てる訳にはいかない。

そして、もし引き揚げが実現したとしても、戦争故に生死も計り知れない兄の存在を確認せず、北海道へ行く事が出来るかどうかとも判らない。

二十二才の私にとって結婚は未知の世界である。もし結婚して、世の中が平和になった時、私の心にわがままが生じて別れる事にでもなればこの人を不幸にするだけだ。今はひたすら故国へ帰りつく事を最優先にしなければならぬ。真情に感謝し、意に副えないことを詫び、雪の中、新京駅でお互いの頭のイヤバンドを交換して見送る。平和な時であれば別の判断も出来たであろう。汽車を追いかけたい衝動を押さえ、駅を後にする。敗戦の傷跡の中の悲しい別れであった。

#### ・口助の撤退

満人の間で、露毛子が引き揚げ、後代わりに八路軍（パール・チューイン）が入って来るそうだが、という噂が高まるにつれ、それを裏書きす

るかのように口助の動きが活発になって来た。

街には数人連れの女兵士たちがカルバスを嘔りながら、圧倒されそうな幅広の腰にスカートをゆすって、混み合う街を闊歩している。

赤地に「壽」を染め抜いた風呂敷をスカーフ代わりに頭に被ったり、赤い長襦袢をコート代わりに着流したり、各人各様のオシャレをしているが、男の兵隊に比して顔付きが良いのは、囚人ではないからかも知れない。

背広を着ていた若い日本人男性が、路上で女兵士数人に宿舍へ連行され、豪華な食事と酒を振る舞われたが、女兵士達にたらいまわしされ、何日か後にやっと脱出して来たという話を聞いた。兵隊同士の男女規律が厳しいのか、女兵士が程度の悪い男兵士を相手にせず、日本人を掠ったのか判らない。

口助に接収された大同大街の関東軍司令部では、内部から持ち出した机、椅子の他、応接セットからロッカーに至るまで、トラックに満載

して次々と運び去って行き、近くの児玉公園では、エンジン、タイヤなどを持ち去られたバスや乗用車のボディが無残な姿で広い公園一ぱいに山積みされている。

大同大街や興安大路など主要道路は、本国へ戦利品として持ち帰る軍事物資、機械類、非軍事物資を満載して運び去って行くソ連の大型トラックが頻繁に往復している。

わずか半年ほど前に侵入してきた時の汚い軍服姿は、関東軍倉庫や繊維会社から略奪した生地を使って縫製した新品の軍服に一変している。

二月、三月と日が経つに従って、口助の姿は新京の物資と共に減少して行き、満人の会話の中に「八路」という言葉が頻繁に囁かれ出し、動揺が広がっていく。四月に入って寒さも漸くやわらぎ始めた頃、ソ連軍は暴虐と略奪の爪跡を残したまま、膨大な量の戦利品を携えて新京から完全に姿を消した。

#### ・八路軍への勧誘

路上の衣装売買を終えた時、長身の大衣に防寒帽、黒眼鏡の男が寄って来て「ちょっと来て下さい」と人込みを避け、

「近く八路军が人民解放のため長春へ入って来る。その入京を援助するための組織を編成している。貴方も是非入って我々に力を貸していただけないか。日本軍にいた時の二階級上に付ける。すでにたくさんの旧日本軍人の協力を得ている。どうか。」と、八路军へ参加するよう勧誘する。語調、態度から見ると、元日本軍将校に違いない。せっかくだが家族もいるので、と断ると「失礼しました」と人込みの中へ消えて行った。その後二・三回同じ勧誘を受けたが、今更他国の軍隊に入る気はさらさら無い。

八路は新京の近くまで迫っているらしく、満人の動きが慌ただしく、家財道具を積んで郊外へ向かう大車や馬車の数が目立ち、表を固く閉ざす商店も増えてきた。

・ 八路军入京 四月十四日

五十メートルほど向こうの、右と左に五十メートルほど隔てたビルの上には各々十人くらいあて、青い服とカーキ色の兵隊が軽機、小銃の音の高い銃声を響かせながら激しく撃ち合い、ビルのコンクリートの破片が煙を上げて飛び散る。その先の、兵隊の姿が見え隠れするビルの屋上からはズッシリとした重機関銃の音が聞こえてくる。展望している最中、突然ビュンビュンと近くを過ぎる弾の音と、ボールに跳ね返る金属音に目をこらすと、右手のビルの兵隊のうち、三人ほどの銃口がこちらを向いている。敵と間違えて狙われてはたまらない。慌てて鉄梯子を滑り降りる。

夜遅くまで聞こえていた銃声も一夜明けると元の静けさに戻り、窓の下には、数は少ないが往き来する満人の姿が見受けられる。

昨日の激しい市街戦の結果、国府軍は敗退し、街の辻々には八路军がたむろしているが、同民族の故か緊張感はなく、野次馬達に拳銃を見せ

行き交う人影もまばらで、不気味な静けさの中を、遠くから砲声が聞こえ始めた。

やがて砲声が近づいてくるその内に、小銃、機関銃の弾けるような銃声が聞こえた。

郊外に布かれた国府軍の陣を破って、八路军が市街地まで突入して来たらしい。流れ弾や兵隊に入られたら迷惑だ。道路から厚い板で階段を塞ぎ、みなが倉庫の中央部に集まって流れ弾を避ける。窓から覗くと、街には何時もの混雑は消え、彼方、こなたの四辻、煉瓦作りの建物の影に小銃を射ち放つ兵隊の姿が見え隠れし、銃声が鋭くこだましている。

高い所から両軍の戦闘状況を視察しようと、二階の屋上へ上って見たが、隣接の建物に遮られて展望できない。この屋上に三メートルほどの屋塔があつてその上に旗掲揚のポールが立っている。

射ち合いの銃声はするが、勇を鼓して鉄梯子を伝って屋塔へ上ると視界が開けた。

ひらかして、屈託なげに談笑している兵隊もいる。街の壁には人民解放軍と、新しく任命された市長の布告が貼り出され、人民の解放と、秩序の維持協力を呼びかけている。一方国府系役人の摘発や敗残兵狩りも盛んで、数人が数珠つなぎで連行される姿もしばしば目にする。

駅前広場では人民裁判が開かれている。主として密告によって摘発され、壇上に引き出された被告は、告発者に呼応する観衆の声によって即決、即断。被害者の中には日本人もいると聞く。

八路军の装備は多種多様、日本軍の軍服もあれば綿入木綿あり、三八式歩兵銃、騎兵銃、チエコ軽機など武器も種々雑多である。

編成も、地元中国人のほか、言語服装からそれと判る日本人、朝鮮人から成る混成部隊だ。

兵士たちは小銃のほかに、木製サック付の大型モーゼルや、ブローニング、日本の十一年式など様々な拳銃を腰にしている。中には胸に十

字に交させた帯紐で、赤や青の房をつけた大型拳銃を腰に吊り、二丁拳銃よろしく得意顔の十四・五才の少年もいる。

こんなに多種類の銃の弾丸はどんな方法で調達補給するのだろうかといらぬ心配をする。

・八路軍からの逃走 四月十六日

八路軍に日本部隊がいると聞き、先に入隊勧誘を受けた事の興味もあり、長春大街の工場跡を訪ねる。

門に衛兵二人、階級章は付けていないが三八式歩兵銃をはじめ、軍装はすべて日本軍のままだ。話しかけたが無言のまま、不動の姿勢からの応答はない。中には四・五十人ほど居るようだが、諸動作から見ると日本人に間違いない。隊長の意志で隊ごと八路軍に入ったのだろうか。

戦争に負けた日本軍の一部隊が八路軍の中で生きている。複雑な気持ちで工場を後にする。

吉野町へ帰りつき、階段を上り切るとK子とTさんが中からとび出して腕を掴まんばかり、

「北島さん、すぐ逃げなさい、先刻、私服の八路と兵隊が十人ほどやって来て、家探しした上、竹田さんが口助から受け取っていた食料などを全部持ち去り竹田さん夫婦は縄をかけられて連れて行かれた。ここで経理をやっていた男は何処だ、と貴方を探していた。捕まったら連行されるから早く早く」とせきたてる。

竹田が口助や国府軍と仲良くしていた事がばれて、その濡衣でも着せられればいつまで拘束されるか判らない。逃げるに如かず。

いまさら阿知波さんへも行かれない。ともかくここから出なければ危ない。僅かな手回り品と衣類を毛布に包み、皆に別れを告げて下へ降りると、後ろから小さい包みを持ったK子が、「私も連れて行って」と付いて来る。K子は義姉一家の生活の援助のこともあって、私と行動を共にしたいのだろう。竹田の所においても収入はなく、姉達を養うことは出来ないのだから。方々探し歩いたが、先日の市街戦で破壊され

た家が多く、住み付けるような空家は見当らない。日暮れて後、街外れの小さな空きビルを見

付けて入る。窓硝子は敗れて屋外と余り変わらない。部屋の隅で毛布にくるまり寒さに堪えかねている夜更けに、突然銃を構えた八路が入ってきた。「誰呀(スイヤ)！」黙っていると

「日本人(リーベンレンマ)?」「是(シー)！」の答えに敵も安心したらしく話しかけてくる。

どうやら、日本人は家がなくて、こんな所で大変だな、という意味らしく所々で「辛苦(シンク)辛苦」といつている。

危害を加えられる心配はなさそうだ。どうぞとビール瓶の白酒(バイチュウ)を差し出したが「不要(ブーヤオ)」「饅頭を差し出すと「謝々(シェーシェー)」と一個だけとって出て行った。

・中銀社宅 四月十七日

K子の提案で、ペーシャとマーシヤを訪ねる。大同広場の近く、公園を横切った所の、大き

い平屋建瓦葺のりっぱな日本家屋だ。

隣にもう一軒、同形の家がある。ちょうど二人とも在宅で、事情を明かすと、快く同居を受け入れてくれる。この家は中銀の幹部社宅とのことで、洋間の他に和室が五室もあるような大きい家である。ここにはペーシヤ達の他に中年の夫婦連れも住み着いていた。

押し入れには何組かの柔らかい布団、台所には炊事用具一式、必要なものは全部揃っている。ここに住んでおられた人は敗戦後直ちに南下された由、無事に鴨緑江を越えられたのだろうか。

窓は全て二重窓で、防寒のためか、下から三十センチぐらいまではガラスとガラスの間に棉が詰め込んである。念のため棉の中を探すと、中からブローニング拳銃一丁と弾三箱、さらに天井裏からは風呂敷に包んだ日本刀二振りと手榴弾が出て来た。

武器・弾薬は提出せよという布告が出され、密告で家探しされた家もあるのに、もしこんな

物が見つければ、言訳の仕様がなない。人民裁判にでもかけられればどんな目に合わされるか判らない。万一に備えて同居人達には、全部を溝へ棄てたと偽り、品々を油紙に包んで、いざというとき取り出しやすいよう、ピストルを一番上にして縁の下へ埋めた。

衣装売買はK子の義姉の家で仕入れて近くの吉野町で売ったり、持ち帰って大同広場、三井百貨店の辺りで捌いたり、商圏が広がった。商品は途切れる事なく供給を受けられた。

・同居生活・燃料

この家は各室のラジエーター、洗面、浴槽への給湯、炊事は台所のボイラー一つで出来るよう便利に出来ているが、燃料が必要だ。石炭は入手し難く、薪も運搬に手数がかかる。考えた末、隣の家を燃料に充てることとする。隣にいた人達が再び掃り住むことはないだろう。

先ず廊下を剥がして薪にし、廊下を剥がし終えると次は敷居、鴨居、床柱、天井と、日が経

つに連れて、立派な家は主柱と屋根だけになる。最後の頃には負荷の少なそうな柱まで切ったが、お陰で毎日暖かい部屋で快適に過ごしほとんど毎晩入浴する事ができた。

同居のペーシャ・マーシャは、竹田に強制されて口助の相手をしていたが、二月に口助が転出したのを機に、竹田の所を逃げ出してここに住みつき、それから後はダンサーとなって毎日踊舞場へ通っている。

朝はその彼女らも加わり、みなが揃って米食をとり、昼は各々外食する。饒子や雲吞のほか、店頭で、麵棒や包丁を使わずに、麵粉の生地を両端を持って前後に回しながら段々細くして麵に仕上げるのは見て面白く、食べて美味しかった。夜は線切りの豚肉・馬鈴薯ややしを炒めたのを肴に、白酒で晩酌をする。はじめの内は一合で良い気持ちになっていたが、酒量が上がって引き上げる頃には毎晩ビール瓶一本(一升)宛の晩酌を続けていた。一升三十塊(円)ぐら

いだったろうか。

・八路軍撤退 五月二十二日

五月に入ると、厳しかった冬将軍も去り、麗らかな陽に公園の花も咲き乱れ、日本の春を思い出す。

無断入居した社宅の生活にも慣れ始めた頃、衣装売買相手の満人の間に、蒋介石直轄の中央軍が、新京の奪回を計って攻略するらしいとの噂が囁かれ、広まっていった。

噂が高まるに連れて八路軍の動きが慌ただしくなり始めた。要所要所には麻袋の土囊で銃座が築かれ、完全武装の部隊が荷を満載した大車を従えて続々と移動する様子に、戦闘開始の間近さを感じる。街行く人もまばらになり、衣装売買は当分中止するしかない。

家中の出入口は全て厳重に戸締まりをして、万一のために密かに掘り出した拳銃を身につけ、何事も起こらない事を祈りながら全員一室に集まって床に就く。

夜更けて突然、裏口を叩く音に眼を醒ます。

「開門、開門！」ドアが壊れんばかりに叩き続ける。八路軍か中央軍か。何しに今時、何の目的で来たのか。開けるのは気持ち悪いが開けなければ壊してでも入って来るだろうし、後の仕返し怖い。腹のブローニングを手で確かめ扉の門を上げると、荷を担いだ木綿服の兵隊が数人雪崩れ込んで来た。拉致するのかわそれともこの家に立て籠もる積もりか、と立竦む我々に目もくれず、各々が担いで来た布団や麻袋を床に投げ降ろし、隊長らしいのが我々に早口で何事かまくしたてると、全員が慌ただしく走り去って行った。予期せぬ一瞬の出来事に、ただ呆気にとられて何が何だか訳が分からない。

「これから我々は戦闘のため移動するが、近い内に必ず戻って来る。それまでの間、これを預かって置け」というペーシャの通訳に驚いて顔を見合わせるばかり。中央軍の攻撃を避けて退却する忙しい最中に、なぜこの家へ布団や米

を投げ込んで行ったんだろう。本当に戻って来る積もりなのか。それとも日本人に恵むためなのか。どうしても解せない真夜中の不思議な出来事であった。

・中央軍の入京 五月二十四日

外は静りかえり、市街戦の危険もなさそうなので大同広場へ状況視察に行く。途中、何力所かに、昨日までとは打って変わり立派な装備の兵隊が立っている。

横丁に十人ばかりの人集りを見つけ、人垣の間から覗いてみると、ウールの青い軍服に、幅広い帯革、長い編上靴、帽子から靴まで新品の装備で身を固めた兵隊が頭の弾痕から流れ出た血で地面を染め、目は見開いたままで転がっている。死体見物の人垣の内にも憚られ、立ち去りかけた時、集まりの内の一人在、辺りを見回し、死体の編上靴の紐を解いて持ち去って行った。とすぐに、次の奴は帯革を、次の奴は大胆にも上衣の釦を外して死体を転がしながら

ら剥ぎとり、僅かの間に兵隊の死体は哀れにも下着だけの姿になってしまった。

中央軍の兵隊に見つかれば大変な事になるだろうに、大胆な事をするものだ。辺りに他の死骸が見当たらないのは、運悪くこの兵隊だけが狙撃されたのかも知れない。

八路軍は中央軍との話し合いで新京を放棄、退却したとの噂もあったが、先月八路軍が入京した時の様な激しい戦闘もなく、一夜の内に両軍が入れ替わったのは、拍子抜けした安堵でもあった。

広い大同大街を蒋介石直轄という正規軍（中央軍）部隊が整然と隊伍を組んで堂々と行進して来る。今までの口助、国府軍、八路軍とは異なり、戦闘用にはもったいないような真つ新の軍装に身を固め、ジープやトラックを連ねた近代的部隊の颯爽たる行進に、沿道の見物人は目を見張って見入っている。

回りの満人が、「自動車も武器も軍服も、あ

れはみな、蒋介石が美国（アメリカ）から貰ったものだ」と物知り顔に話し合っている。

主力は潮が引くように去って行ったが、一般民衆の中に潜り込んだ八路軍の残党や、駐留中八路軍に協力した者達が虱つぶしに摘発逮捕され、ジープで連行されて行く。

街の壁には中華民国政府と、新しく任命された新市長の布告が貼り出され、政権の交替を告げている。

中央軍の駐留によって、もはや八路軍に追及される恐れもなくなったので、久しぶりに吉野町の竹田の所へ行く。竹田夫妻は八路軍に連行されてから一切消息が判らず、あとは竹田の縁者が、倉庫内の文房具などを露店で捌いて生活しているとのこと。

竹田夫妻は八路軍が撤退する時、一緒に何処か連れ去られたらしい。

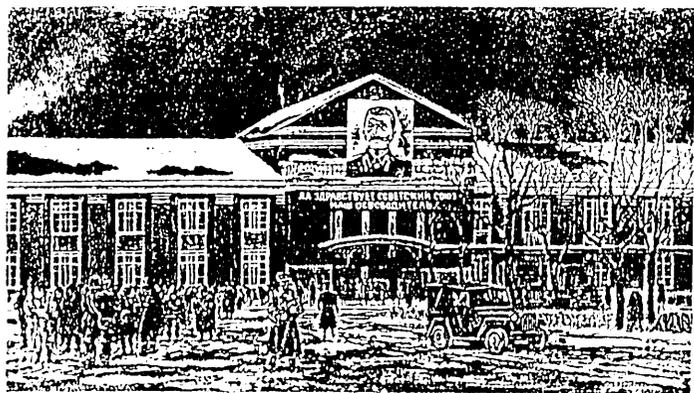
・引き揚げ 七月

中央軍入京以来、日本人の間に、中国政府と

日本人居留民団の間で、引き揚げの話が進んでいて、間もなく引き揚げが始まるそうだから、いや、来年になってからだそうだから、みなが渴望の、引き揚げについて、色々な噂が飛び交っていたが、七月八日に第一陣が出発したとの情報で引き揚げの実現はいよいよ確実になってきた。

引き揚げは難民や困窮者の多い地区が優先するとか、何所の地区は何日に出発が決まったなど、噂は具体性を帯びてきた。その一方、いよいよ帰れるのかという期待と、本当に実現するのだろうかという不安が交錯する。

期待と不安の錯綜が続いたある日、K子から嬉しい話が飛び込んできた。K子の義姉の地区は八月初めに引き揚げの事になったので、義姉の家族として町内会で登録して貰ったというのである。待ちに待った引き揚げが遂に実現するのである。闇夜に灯火の如く、目の前が急に明るくなる。



西島武郎氏画 《昭和21年正月の新京駅》

ここ日本橋通りの辺りも、近い内に引き揚げになるらしい。日本での再開を約して辞す。

・引き揚げ 八月上旬

左腕に腕章を縫い付けた吉野町周辺の町内会の人達と共に南新京駅へ向かう。  
大半をモンペ・ズボン姿の婦人が占める一団がリュックサックを背に、真夏の太陽の下、約二キロの道程をソロソロと、再び帰り来る事のない住み慣れた町の姿を眼下に焼きつけておくかのように、振り返り振り返り、ゆっくりと歩みを運んで行く。  
敗戦国民としてこの一年、明日をも知れぬ不安な日々を幾多の忍従に耐え、営々としてきずいた財産を、たった一つのリュックサックに代え、最愛の夫や息子の消息も知れぬまま去って行かねばならないこの人達は、後髪を引かれる思いであろう。  
駅前広場で点呼の後、やっと車輛に乗り込む。高さ一メートル足らずの側板の無蓋車にリュックサックを置き並べると、足を伸ばすゆとりもない。各車輛ごと、全員乗車の確認が終わわり、いよいよ待ちに待った日本行きの列車は、連結

出発の日は近い。博多上陸まで何日かかるか判然としないが準備は充分にしなければならぬ。非常用携帯食として、米・大豆を支那鍋で煎り、水洗いした御飯を何日も繰り返し天日に干して楠（ほしひ）を、生醤油で煮詰めた牛肉の塊を薄く切って天日で乾燥。幸い好天に恵まれて乾燥食の製造は順調にはかどる。五人の十日分として相当の量である。  
手作り食料のほか、露店の満人から、元関東軍の乾麵包、肉缶、乾燥味噌などを買ひ揃える。引き揚げに携行出来る荷物はリュックサック一個に限られているので、かなり大きく、かつ頑丈な物でなければいけない。携帯天幕、帯革ベルトを材料に、貴針、爪糸、千枚通しなどを使って、しっかりしたリュックサックが出来上がる。あまり体裁は良くないがポケットも尾錠も、コップ吊りまでついた立派なものだ。初年兵の頃ビール瓶に靴下を被せて穴かがりした事を思い出しながらの作業であった。携帯食料、

衣類、油紙、携天、水筒、食器などを各々のリュックサックに詰めて準備完了。  
出発の前日、日本橋通りへ挨拶に赴く。  
甲斐さん宅の 上候補生、阿知波さん宅の梅原候補生。昨年七月に関東軍経理学校第十期生として入校以来、吉林からの行動もともにした二人に、お互いの無事帰国と日本での再会を固く約す。  
昨年八月二十五日夕刻、行く先もなく路傍に砲列を敷いていた六人に、二階から声をかけて貰ってなければ、今日までの一年間、生き延びる事が出来たかどうか判らない。  
阿知波さん宅で送別会をして貰う。  
毎晩アルコールの強い白酒を飲んでいた故か三十度の軍用濃厚酒でもなかなか酔わないし、酒の匂いも味もしない。御飯茶碗で五杯目にやると酒本来の匂いと美味しさが判る。  
波乱に富んだ一年間の思い出の話に花が咲きおそくまでご馳走になった。

機の衝撃音を伝えながら発車した。スピードが上がるにつれて新京の街は遠のいていき、車輛には、ホッとした安堵管が漂う。

故国へ帰れるという嬉しさと、長年住みなれた思い出多い新京を後にする哀愁を一杯に積め込んだ長い無蓋貨物列車は、汽笛と煙を残して南へ向かって走り続ける。

貨車の揺れに身を任せている内、やがて遠い荒野の果てに陽は沈み、冷たく頬を掠める風に身を寄せ合いながら、いつの間にか眠りに落ちる。

不意に眠りは悲鳴とざわめきに破られた。何事ならんと、暗闇に眼をこらすと、四・五人の満人が、中のリュックサックを狙って、貨車の側板越しに手を伸ばし、盗らせまいとする内側との引つ張り合いに騒然としている。

駅に停車中の引き揚げ列車を狙って近くの満人が掻っ払いに来たらしく、棒などは持っていない。貨車の隅にある用便用の石油缶を棒切れ

で鑿打ち叩き、大声で喚き立てると暗闇の中へ走り去って行った。起きていた人の発見が早かった故か、被害はなかったが、今後の用心のため、男性は全員側板に沿って席を占める。

夜が明けるとともに走り出したが、途中、小さな駅で度々停車を繰り返して、距離は仲々はかどらない。順調に走りが続いていると思えば、高粱畑の打ち続く眩野の真中で突然停車。三十分・一時間・前結車輛からの連絡によると、満人の機関士が、機関車の故障を理由に、何万円かを要求しているとのこと。真夏の太陽にジリジリ焼かれ、吹き出た汗が乾く頃になってやっと走り出す。金で故障が直ったらしい。

約三百キロを三日ほどかかって、やっと奉天に到着。工場跡らしいガランとした建物の土間にアンペラや筵を敷いただけのものだが、窮屈な貨車のギューギュー詰めと強い陽射しから解放され、手足を伸ばして寝られるのは幸せだ。食事は、小隊ごとに材料の配給を受けて自炊。

私は希望して、数人の人達と共に炊事係になる。主食の高梁をかまどにかけた大きい支那鍋で、煙に涙しながら炊き上げる。炊事係一同、高粱飯を炊いた経験がないので水の分量も良く判らず、軟らかすぎたり硬かったり馴れるまでは苦労が多い。副食はきゅうり、馬鈴薯、なすもやし为主で、調味料は塩と醤油。

高粱は、原隊では馬糧だったのに、搗いてあるとはいえ、高粱は高粱だ、美味しくない。だが、白米などあろう筈がなく、帰国までの体力を維持するためには何とか食べなくてはならない。窮余の一策、鍋の底に付いた一センチ厚ほどのお焦げを包丁で剥がし、醤油を付けて食べてみると、焼きすぎた煎餅のようだが、高粱飯よりよほど美味しい。塩揉みのなすきゅうりを副食に、これを常食とする。携帯の非常食を食べたいが、いざという時のために我慢する。

奉天での止まりは一日か二日と置いていたのに、仲々出発の気配はない。団からの情報では、

葫蘆島までの間、先発の組がつかえて、先へ進めないとのことだ。日本との間の船が何かの事情で、順調に往復していかないのだろうかと不安が拡がる。

一週間ほどの後、再び貨車の旅が始まる。相変わらずの気紛れ運転が続く、走っては停まり停まっては走るの繰り返して、三度に一度は車輛ごとに修理費の割り当てがあり、支払が済むと何事もなかったように走り出す。効果はきめんだが腹が立つ。

出発時、宝石・貴金属の携行は禁止され、現金は一人千円までと制限されていたので、我が分隊では各人に千円宛渡したほかに、予備として一万円ばかり、お守り袋・腹巻に隠し持っていたから良いが、それがなければ、すぐに底を潰してしまふころだ。

炎天下、飲んだ水は汗とはなるが、下からの排泄まで不要にするものではない。そのための石油缶を置いてはあるが、衆人監視の中で、そ

れを使用出来るのは、せいぜい小学生までで、大人は余程の事がない限り使用するだけの勇氣はない。

長時間走行が続き、眩野で停車すると、我れ先に梯子を伝って降り、いつまでか判らない停車を気にしながら、列車に背を向けて程々の離れ過ぎない所で用足しする。初めの内は、小さい茂みを見つけては走っていた女性も、回を重ねるに従って近くで済ませるようになる。

奉天を出発した翌日、雨が降り出し、初めは灼けた頬に心地良かったが、やがて豪雨に変わると、油紙と天幕だけではとても防ぎ切れるものではなく、床には水が溜り、荷物も体もビシヨ濡れになりながら、ひたすら身を縮めて雨の去るのを待つしかない。

濡れた後、一晚貨車で過ごし、翌日、次の収容所にはいる。

ここは学校だったらしく、ガラスの破損した箇所はあるが、板張りの床は、土間にアンペラ

よりも、ずっと気分が良い。

雨に濡れた衣服を乾かし、食料を出して見ると、せっかくの手作り乾燥食料は、濡れたまま長時間陽に当って蒸れたのか、水を吸って膨張し、腐敗してしまっている。早い内に食べれば良かったと思うが、後の祭、これで非常用糧味は僅かな缶詰だけとなってしまった。

この第二の収容所で旬日を過ごした後、もう一カ所で数日滞在し、葫蘆島の収容所に入る。収容所の回りの金網の外には、満人の物売りが朝早くから、手押車、手籠などに焼売、饅頭、饅頭、とうもろこし、焼豚、鶏卵など色々な物を大きい売声をあげて集まってくる。出発前に作った非常用食料は雨で失い、支給される高梁飯だけでは大人はもちろん、栄養失調状態が続いている子供たちの目は落窪み、痩せ細った手足に腹だけが異状に膨らんだ姿は見るに忍びない。新京出発以来、肉らしい物を食べた事のない子供に饅頭や饒子を買って与えると貪るよう

に食べる。沢山に買いたいのが、値段は新京の倍以上も高くて所持金はなくなりお守袋から取り出して使う。

母親の栄養失調は乳飲児への母乳不足となり、膨らんだ腹と痩せ細った体から出る泣き声も幽かた、あと何日か続く旅に体力が続くかどうか危ぶまれる。門番の目を掠めて街の薬屋で缶入りの粉乳を求めて来てお湯に溶かして与えると幼い両手で哺乳瓶を抱え込んで貪り飲み続ける。当分飲ませ続ければ体力も付くだろう。

明日はいよいよ乗船の日。港近くの仮宿へ移動する。三十人ほどの小隊に、日本家屋の八畳一間と縁側が割り当てられた。とても入り切れるものではない。押し入れまで含めて、女子供は、夜露を凌げる建物の中に入れ、男は屋外。私は軒下に積まれた薪を均らし、蓆を敷いて仮寝の宿とする。仰ぐ夜空は清く澄み、遠くに星の瞬きがきれいだ。明日はいよいよ待ちに待った日本行きの船へ乗船、満州の地を離れて行

くのだ。

緑園での非常呼集から一年、行軍、脱出、衣装売買、無蓋貨車、収容所と思いは回り、仲々寝付けなかった。新京——葫蘆島約六百キロ、一カ月ばかり、長い旅であった。

・八月三十日

陽の昇るのを待ち兼ねるかのようになり、早くから起き出して荷物の整理にかかる人、辺りを掃除する人、嬉しさを抑えかねてか、どの顔にも笑みがこぼれる。

女の人の中には、昨日までの汚れたカーキ色の開拓団の服を、きれいな和服仕立てのモンペ服に着替える人、リュックの奥から取り出した化粧品で薄化粧する人もあり、昨日まで女らしさを隠していた人が見違えるばかりだ。一日も早く元の女に戻りたいのだろう。

朝食もそこそこ点呼を済ますと一キロほど先の埠頭へ向かう。

照りつける太陽の下、ソロソロと様々の姿に

リュックサックを背にした集団が、緩い歩みを進める。両手に子供の手を引っ張る人、老人の手を引く人、汗を流しながら、満州最後の行進が続く。気の緩みと焦りに足が竦んでか、列の後尾に老人や婦人の遅れが開始される。

栄養失調の体でこの強い日射しの中、重いリュックサックを背負っての行進に耐えられず、うずくまる人もいる。「もうすぐ港です。頑張って埠頭まで行けば、日本へ帰れるのですよ」と手を引っ張り励まして歩かせる。黒く汚れた顔に眼だけが光っている。最後の頑張りだ。

小隊の最後尾について遅れ勝ちな人達を励ましながら埠頭の広場に着くと見えた。岩壁に横付けしているのは軍艦だ。艦尾にはためく日の丸の旗が頼もしく、思わず目頭が熱くなる。

埠頭の広場に一メートルくらいの間隔に整列して、荷物の検査を待つ。老人や婦人の中には、熱さと安堵感のためか、その場にへたり込む人もいる。

小隊ごとに舷側で引き揚げ団役員に名簿と腕章の照合を受け、タラップ脇に立つ中央政府の係官に御辞儀をして満州最後の一步を蹴って艦上の人となる。

甲板でキビキビと立ち働く若い水兵の姿が頼もしく映る。

艦尾に日の丸の旗を翻すこの艦は、日本海軍の軍艦である。だが、砲塔に砲なく、銃座に銃は無い。幾度かの海戦に航空母艦付として活躍、武運強く生き残った歴船の勇者、駆逐艦「宵月」は武器を取り外し、もはや軍艦ではなくなっていた。

そして二昼夜、満州への郷愁と、帰国の喜びを満載した艦は勃海、黄海の荒海一三〇〇キロ、白浪蹴立て、博多港へ着いた。

時に昭和二十一年九月一日

検閲のため港外に四泊した後、九月五日全員夢に見続けた憧れの日本、博多へ帰り着いた。

新京——博多、私の生涯の内でもっとも長い

新京出発の時、現金は一人当り千円までに限定され、貴金属・宝石類の携帯禁止が厳しく言い渡されていたが、引揚船を目の前にして、その検査が行われようとしている。一人でも不法所持が発見されれば、団全員が残留させられるとあって、緊張が漲る。

静まり返った一団の横の列の中にカーキ色の服に身を包んだ、木暮美千代さんを見つけた。白粉気のない素顔で、スクリーンで見るとは感じが違うが、目元・口元は彼女に間違い無い。満映の人達も一緒に引き揚げるのだろう。

やがて「気を付け」の号令とともに、一装用の軍服に身を包んだ中央軍の女性将校が、兵隊数人を従えてやって来た。小脇に革鞭を挟み、昂然と胸を張って黒革長靴の音高く、悠然と列の間を見回りながら通り過ぎる。

荷物の中身を調べられた人もなく、検査はこれで終わり。緊張は一瞬にして解け、ホッとした安堵感とざわめきが広がる。

一年であった。

### ・後記

四十五年前新京における一年間の生活の内、強烈な印象は脳裡に残って昨日の出来事かのよう鮮明に思い出されるが、記憶の底に沈んでしまっただけ思い出せない事も多い。

中には忘れ去り思い出したいくないことや心に深く秘めて置きたい事もある。

昨春京都で同期の候補生方と戦後初めて顔を合わせた時、同期の殆どの方がシベリア抑留で筆舌に尽し難い苦勞を強いられたお話を聞き、吉林から脱出した六名が新京に舞い戻り、各人各々差はあるもののどのような環境の下で生活したかという事を知っていたためと、敗戦という希有の時期に外地で生き延びた私の経験を記録しておくために馴れぬ手に筆をとったものである。

経過の内、記憶の臆気な点は才田中尉殿の八

一五終焉記、時山候補生の手記などを参考にさせていたただいたほか、県立図書館、県福祉課、厚生省など出来るだけの情報を入手し、記憶を蘇えらせつつ整理、記述したが、日時場所などに誤りがある点は時の経過によるものとご容赦いただきたい。

尚、筆をとるに当って緑園の同期生であり、また商工中金の先輩でもある今崎永氏から数度に渉って資料の提供と、激励いただいたことに厚く御礼申し上げる次第である。

また 新京の街角で行くあてもなく途方に暮れていたわれわれ六名を招じ入れて、救っていただいた命の恩人の阿知波さん、幾度か生死を共にした梅原候補生とも引き揚げ後二〜三年は連絡がついていたが、その後ようとして連絡がとれず手を尽くして探しているが消息がつかめない。

この手記を書くことができたのも、救っていただいた阿知波さんのお蔭である。心からお礼

を申しあげたい。

平成二年十月三十日

【筆者のミニ自分史】

今瀬 正夫 大正十二年十月三日生まれ

〒六九〇一〇一 松江市西浜佐陀町一三八三

☎ 〇八五二一三六一八五七八

① S十九年十月一日 朝鮮軍第十九師団山砲兵

第二十五連隊現役入隊

S二十年四・五月頃 同騎兵第二十七連隊へ

経理部幹部候補生集合教育のため派遣される

教育完了後、甲種幹部候補生

S二十年七月一日 満州第八一五部隊（関東

軍新京経理学校）へ入隊

② 朝陽鎮 部隊長より全員への伝達により、

敗戦の絶望感から自決しようとする榴弾を手に

したりしたが、地を這ってでも必ず日本へ辿

りつこうと決意した。

③ S十六年三月 (朝鮮殖産銀行入行 元山支

店勤務

S二十一年九月 新京から一般人として引揚

掃郷

S二十二年三月〜二十五年十二月 島根県農

業会、改組により後、島根県信用農協連

S二十五年十二月 商工組合中央金庫入庫

松江・京都・帯広・長野・福山・松江

S五十三年十月 定年退職

S五十三年十一月〜六十二年三月 嶺山海へ

再就職

定年退職

④ S二十五年結婚の妻敬子と二人住まい

長男（放送機器整備業下請）は相模原市、

次男（ホルン奏者フリー）小金井市

趣味 写真撮影・GOLF・古文書・謡曲（

三年間練習中）・木工（指物）Ⅱ大学、訓練

校の木工教室で受講、製作

## 私と園緑

・緑園会の生いたち

千葉県 栗林 達雄

新京陸軍経理学校第十期生の集まり「緑園会」

が誕生したのは昭和四十八年のことである。

その経緯を書くと、終戦となり、私がソ連に抑留されたのは黒河の対岸、ブラゴヴェシチェンスクの北方六十キロのところにある、ノウオアレキサンドロフカと言う小さな農村にあったハバロフスク地区第十三収容所である。その収容所にいたことのある人達で、「アレキサンドロフカ・プリヤン会」が結成されているが、そのメンバーの中に十期生が物故者を含め四十